風俗醉茶夜談前編巻之五

東都　多羅福山人　戯撰

門イ 曽5
號 130
巻 2

氣形門土第五

中一 鹹之

穀梁傳に文公十一年ん叔孫得臣長狄のまやしがね三人と鹹といふ地におはらくやふりてこれにかちりるに此三人ひるねけき大男にくそのまハ九畝ほよこるいりまのくびハムタまにハ坊てぐれハそのまゆこそ軾のほかに凡えるりとぞ范甯どのく誰に九畝とハ五丈四尺といふめまとし公羊傳何休どのく語にハ長狄のたけこれ百尺

と志るきまゝ道ハ穀梁の五丈四尺といへる註とハさた
かうのちがひなれ春秋考異郵のかつなんと公羊の注
と同し道ハ何体とのことも志がらく緯書によりて
せんまそうまゝ道ハ事にやゝ傳丈にその才九畝に
よこさハまつりといふときハひろさ一歩にながさ百歩乃
そのを九ツ所ハまたるなけなるハ范甯とのいふなし
五丈四尺のかつをよしといたましや又杜註左傳に
三丈と志るし所道ハ長狄の寸尺こそいづ道のふことを
ふしんまへんや蒙求に解ふくこれを後ちるに魯語に

呉子ふるゝをこぼらて臣骨をつてがるにその大ひ
さくる海をかけたるになし道ハ魯に好聘せし打
うこ道を孔子にまたげ○をまるに孔子のおほ分あり
りるにハむかし高諸侯をつるゝ山の山に會しまふ
時防風氏おくまていたりしかゝころしてまゝをとく
せるにその後○こそくるまをこそのたらにしてがりきと
防風氏ハ霎夏商のあいだにありてハ汪芒氏といひ周の
時にありてハ長翟といひいまにあるてハ大人といへりと
こゝへまひしかハ呉の客又問ひもておよそ人のうみ

ながきことのハいくだくをかぎりとしたるゆゑといふ
毎れバその時孔子のをほかる僬僥氏ハこれ三尺ニじ
かきのいたりなり ながき人といへども此尺を十たる
となるゆゑにしきさし絶ところへさ分あふたる所ニ人の
うふとき御云を河邊見ゆ三尺を十だるにあらず
さハ杜頑とのゝ三丈と志るされしを志やうかりと
いふへ見ゆさてこそ文王の聖躰十尺埆飯遠祖丈六の
こんぶんなるも此長狄とはいへべしあて皆れよぐ
さしましいたんやまるやましやかゞ毎けなんといふ絶る

東都の名るあふたけたかき角觝人とて風俗の人ハ
さしなき大人のことくなりしあてがるが左國公穀志よでん
に乃ちたる大男とものこころにハつまるまれべき小曹と
やかもりん
王充論衡に張仲師ハそのうけ一尺弐寸なりとぞ萬葉
に解ふてこゝを後だるにあゆ毎けのひきしの屁ゆ
いちたんめのたし絶なりさしめて此人の国ことての
そこなバ僬僥氏の三尺なんどハ又大男とや れもハまし
ことのとのゆゑ見ゆへきんらゐ東都風俗のことてたやゆる

しかのはりかくすみちんあやしける事申しけるに玄宗
ともて此子何ゆゑひろふることぞとたづねあれば
張仲師がつまひしかバそこを夫婦ぶりをまかる処
南史扶南国の傳に毘騫国ハ扶南の南八千里の海ゥ
中をはなれなんはるへくりその國王身のたけ一丈
二尺頭の長さ三尺なりけるが此王いにしへより死
せざる所をもしいくだいといふ事をしらりの
おかりける王うまれてよりせんとしいま中のちんあくみ
らあのるまでよく世の中の國ふくのさかえけなるりの

し王とあざむきける事なくて治めける也いはふぐし
多まこば南方の人こまと長頸王とてあるとなりけれど
此薬子得て多まこと涙ぐるに此王うまれつきふし
頭かくかくながかうめハ不臭の人とやいふべき盤書
のなかやまひかく頭骨のぬけりでぬる旋と飛頭蛮
と名つ多まこハ此も頭王こそならし飛頭蛮の
多くひなしゑいゑんや毘騫ハ扶南の南八千里乃
はりまはるて志りしてきよしなんの蛮国なりしが
盤書の飛頭蛮のやまひなんと毘騫王のるすかまうた

名つ事まる文字かや風俗のおとしいぎに此りの名げ成
て轆轤（ろくろ）ふびといふあるまことにつまたなきめいやうなれ
どもそのひちごみ乃ほがまゝなれるりてかくこれを
いふこゝ也たゞあやしむべきハむかしの長頸王（ちやうけいわう）を
男なりけるがいまの世にとりぬ法なるろくろくびなんどハ
男なくて皆をしなりにぞ何りまゝ何まゝ人をおそろ
しけなるふろかえとまみだして鉄（くろ）醤つ事さる
口うちひらきにこくまひしてくやのひやうぬのう
へなんかのふびゝ乃ほうれ何りまゝ思ひけるさでこそ地

獄の思づにあらん人の由うまいなくて皆ひらねまん
かく乃紙あてくるまとりさけ何るの日本人ぢかり
何ぞと同じきものにや

四才

法苑珠林にさぬいきに神八人あまりけるがそのかたち獰（くく）
獰（まし）くしてゐるまんからをいふなりしをとらて
ことらてゞるがその名を金剛力士といへりとかやむかし
世尊の雷音寺にさへりしかしこれ時此金剛力士ごとゝ
のしまくをでつと見たりと范成大桂海虞衡志にたよ
そざぬ志よ乃寺門を見ほるに両金剛の神をかく

わしてゐるあませんこゝゐ山川のうちのりつともの
なるものなりき一神の名をハ婁至徳といひ一神の名
をハ青葉髻といへりとそ義葉を解ふく此を後
もゐる婁至徳青葉髻の二佛こそ風俗のとり沙法
せる二王の事なるけれ此ハ桂海寰衡志にも
せんこゐぶつのことりともの名なるしなり
ハ武家なしきなんどの奉公人にあてくゝ面んに
つじぐんあしがるむしきのことのいふべきさて
こそらくせきにそちたぐかりゐるなるのさきにもしる

五十

んづなんどはるゝハ番右衛門ハ鋪にこそ見えたれ
魏志濊貊傳に濊のことなるハ辰韓につゞきたるハ
高句麗のよくしたるにせんしひがしハ大海とぞき
くめていまゝちやうせんのひがし皆その地なるゝなる
此国果下馬といへる駒といふなるハ後漢の桓帝の時に
しめてこれを中国にもんがりとぞ裴松之どのゝ註
に果下馬ハそのたけさ三尺なる馬なりけるを乃
あけの早くかりぬれバ今をむかしのでしにしたるにこゝ
べきてるなれハとてこれを果下馬とハ名つけ毎り

張華博物志 觀都賦なんどはしるしてありけれ
とぞ蒼葉を碎ふくこまを誤れるを觀志にいふめる
果下馬ハ日が國の土佐こまなんといへるとのなりめ同し
さらんてのうやうこうにくなしじたるちくるいなまし
ども此けものことぐんこくのうきやうおよそその世用に
急きなきものなるにやさてこそいるき史のふこにもしる
さまにはしれ日つかる三國志のなんぬるころほひに陳壽で
のゝ見ざしにおいさハ一るのさいちねるまいま又東部
風俗のめいまんにたるのたしめ所ことなんどいふめる

ちあるが陳壽どのくらくぬりもこまとがなどかしら
まざらん此馬とのかたちのちなさりれバ人のせるに
勝されとしよく二所がり調子のせて所由めるめでこま
馬なまいバとくあまし見るへ申先に見てさへよひし
やまうまことぞ

漢儀注に三月に桑たりし先て生ひぬまバ皇后ミヅ
から東郊苑中に桑とりまし時し蚕室つくりて
かいこをやしなひあふにぞ其の神をまつれるに中
牢羊豕のに急りてせうと又續漢志に三月にいたんぬ

是ハ皇后みづから公卿諸侯の夫人をひきゐまし海
してくだしこうひして先蚕をまつるにその礼
少牢乃如しとぞしるし玉ふとぞ蘇第子碑にてこれを
読ざるに先蚕とハ續漢志の注に蚕神の名なり
としるしてその神の名をハ苑窳夫人寓氏公主と
称し侍りき又儀注にハ苑窳を苑窳につ
くれるのみ杜氏通典に先蚕とハ天駟の事なりと
いひ天文志に天駟とハ房星のことなりといふめるまて
又周礼校人職にも仲春に馬祖をまつるを續漢志にも

季春に先蚕をまつるとありて馬祖ハ房星先
蚕ハ天駟なれバ馬とかいことき(気)の同じきとかや
されバ本草綱目にたゞ頭まつする蚕なりてうの歯に似たる
にさためけるのなりしぎらりこそきるいふひんなる
と又これ周礼夏官大司馬職に原蚕をきんずる
ハうしとやふるんにうしさびいなきしバなりと爾雅注に原
蚕とまた重蚕といふいまの晩蚕のことなりとも
あまた出る二だんどきのかいこの事にて利を射るとも如く
のびざるならざるにて初蚕よりつくしゆゑ桑の葉なれバ

二ぢんだきのかいこそ一ぢんかいおのやしなひにかかれば
ざるまゝにいともまくなかりまゝバそのかねしらぬ
ゑんのかいこの繭(まゆ)のなかまゝと馬のたんそくさぎるとに
なづかりぬるにや同礼のかゝるにかゝるにもかくまんじして
めんなれさてこそ唐入かねどにも重蚕(ちやうさん)晩蚕(ばんさん)をいたく
もまんじいましめてまいゑん季春の春にいたんぬ
是ハ皇后のこづかり先蚕をまやらしむふてつかる
くたとりて天子の御ふくにたくらせむふさるをなし
人王へ紡績(ぼうせき)縫裁(ほうさい)のるこそ申かしへまゝをなめ

こづかりとまもひくきましにやかくそふさき皇后の
御身をして蚕繭(さんけん)のるなん御くるにかけさせむふそるに風
俗のぶんこそのといたるしなまびしのつまるなんどがなる
しのをこしくかゑくさへくさむけくう思く
しくなるまゝハこちやをきゝ小人のたしいたしても
めんいかくなんとにいたうさてしおりかてゆゑにたふ
とかりかし繭帛(けんぱく)を金銀のいまゆひかりてさゆくの
そのだきを長しるまゝにうしきぬまでも金の潚(ぬいかの)し
てがまゝバむかしの人乃ざらげのたし深くまゝ

かなしきを玉のさかづきはくらゐハさけのまぬと同じ
なるかくことらのかたむくおごりのあまりにハ身ひし
えあんまて川くまるこそ下ほんなるほうらへ糠
いこしぬくろしとゑんもてつくるハいこくし
とてさだかりの人にかはるいえじきかほあしかや
あるまんみにつくそのとてハ皆繭帛のこ用ひ得りて
えづからよひ元とおぼへ身ハむかし乃皇后より今
おそまかき内宮者といふべきやかくのことれのつま
えらはるゝあるじの名を問へは袈裟ころもハ

ちやくまのもまなげ蜻蜓をはるまんなり
いへりとぞ

七 水經詮に武平の封谿縣にさしたるけものあんなるが
その名を猩といふめるまるゝ乃こちら人のおりて
よらハうそんやいよく人語をまなび人と相あふく
まじハまるまきく人きかきつまりてかしてうんきん
やぞといふことのなしころしてその肉をくひぬ
ハ人をしくとしをきえ見てそのあぢハひを
つまむぞらしむおよそ穀をさけぬる人を

こまをとらひぬまばそのまゝしいふへからしと華陽国
志に永昌郡に猩々あるまてよく人語をなすその血をそ
朱罽(けぬ)とそ起ぬるつまやうはらなりそのいろあさやか
にしてとし留て黷(いろかな)さるなんと他やくのおよぐる
ところにあらしだとやまつその血を刺(さし)とらんとたりひ
ぬるはしにハ猩々にむかふくなんぢ[illegible]にいくもく
の血をかけるへんやといふに猩々こゝへく二升をある
へんとしへはしたさしてそのかゝどのことく血をいふ
ゑしびむちうわたひて又血をこひぬまばハ又その如く

こひぬるかものごとくに血をまたいたやるなりかくがう
とんせさんばハ多やもとく血をあるへさまともそのかゞど
のいふれるところハ一斗にもとさぬるゝハなりきとぞ
淮南子に猩々ハ往をしりて来をしらざるこのといふ
ある人家の往るをしらびにその人のさんそのさいをゐ
までよくしりたるけそのなるとし唐の裴炎(くいえん)が猩々銘(めぬ)
に阮汧といふ人かつて弟谿に使せし折らそ乃
けと人のりのかたりきかせしに猩々こそつ〇に此山
谷の阿ぐにかくまゐて數百のぐんなしてもとらけるが

さる人の猩々を張せんとてはかりごとをかまへしハ酒(さけ)および
糟(かす)なんどをおきてところゆきかふちのかたはらにまう
けおき又そこにひとつの履(くつ)をつくりかさねてはきその
履をつらね○あそびてこれをとまりける猩々やがて酒を
たしなみ又履をつける事をこのめるによりてはか
らるゝを欲しめさるども猩々のるまゝを張(はか)らるゝを
あるとき猩々まゐりて張らるゝもののせんぞの名氏
をよび張者(ちやうしや)の名をとなへそのしるしにあはれなんだをなを
張らん人をゆるしつゝもやすまいりおもてさらんとてかへり
らぬさいさんしてつかれをまぬかれとあめをのぬ
おとろひもちて又ともなふものどもすこし酒糟(かす)
をなめてうれしやとてやがてのみて酔ひぬればこの
め履(くつ)をはきてはしりまつはるがひきよりてつゐに○ひ
とらへしはたゞちにやうやくまゐりてつかまへし○が律かに
人のいのちをとりころすぞせんとくはかりて萬葉に
殷のくことを読むまたれより名る畜(ちく)生のつ
たなき慾をこのむところのこゝろにそひまよへバ
身をほろぼすもとゝしいまてる事猩々のこゝにかぎる

なまはしながなかさ一二寸をあり[illegible]そのかゝる馬の尾乃
ぶとくにくそのくらけ五六尺をの魚雌雄(めを)ありてその
陰のかたちなんど丈夫(ぢやうふ)女子(ぢよし)にことなる事のなかり
[illegible]ハうこべちかきところの鰥寡(やとをやとめ)のもれまぐしげ
なるましにハ此魚とうへもしあて園庭(ぢんてい)のいけぬまに
やしなひおきけるにそのやねのしらしたしなれる魚なる
にて人をまほつけるなるなくてよく人になじミし
のちにハいづれくからやりけるのあいこハ人とことなる
事なかりしとぞ[illegible]

おもしろ陰陽のあらはしきしまじハくさ[illegible]ましかバ
なんとそのなりにまよりて生ぬべしやこの世にあるわき
まくうこおく西儀(まやうぎ)を生しまじ西儀まじなりて四象(しやう)
を生しまじ四象又まじハなりて八卦(くわ)を生し八卦たが
ひに相ましハなりて六十四卦を生じぬ道ハその陰陽
こそやうようのおこなりけるものひろくなりけるこそ三百八十
四爻(かう)の交感(かうかん)きなりなかりける風俗の匹夫(ひつふ)匹婦のまし
なべにとらぐことやいたんかたしてなる天理しぜんの
こうにてなくて四なりぬるなれともかりそ是にしもの

陰を得ずるをバなまべからざるにや陰の陰にまじ
ハ陽の陽にまじハ生成のかたんの理なれ道ハ生成
のこうりに自ずしていふめ道何道見るべ○こが搬化て
ハふつ○とましハ諸侯大夫の志ならくものがげい
なる白拍子とましハ是ふことくは法なんとむらし
の人にハ何んなるまし志ゆるいのことなるから
さらなれバ○このくり○にをけるがむとくにてからさへの
よらふなるにぞ何んなる道さてこそ洛陽記に入せらる
人をかうさへ思ふなんとも今にあるものとのいろ

ぐるひなるバこ道もなるのをうなるやいなき
九才
酉陽雜俎にふつ○のよしまなる夜なんの事にぶよ
うじて尾をうちぬるバ何をさ火のいてゝるがこれ
を燐とハいふめ道をてにようくるなしなんと
ゆりひぬるバなるらび枯髑髏をとて見てこれをかゝり
はくらのわしをもいやしにその髑髏のいてゞき
にとしまをてやにおちする時しに人にぞだけしより
もし蒔菓に酔ふくこ道を演ぜるに酉陽のふこそ
くるいぶんの董狐南史なる道バそのまうしんの云也の

ゆるふかくとかむ多にきらさらめにまそ野獣のくれ
いをおこなふ皆人のまとふことをしてその
志也つほりふくりきゆまたゆへいづなもてゆそぐる
人にしてこころ志つせるその一座に酒しなればその
志也けつかふのなりさるなんどしまりとべきさよ
せき也へなしめらけ○の人とまとハせるもきよとこそ
うかゝぬべきに括髑髏かゝ小りてゆくとたけせるとハ
何事どやいに風俗の醫者に搬化ぬる人ならハむ
かしのくつ○のうらふまり髑髏なんとハふかめかし

とて袈裟ころもとつてなきもて覆面ぐきんかな
か外套小まきざしこそ入用の古董なれ夜にまぎれ
て八丁なれ手にまるちようちんハさてこそせう○
の志り尾の火なりけり

十月 日本記に任那国ハつくしをさる事 二千餘里雞林の
西南に向ふなり宣化天皇二年ん新羅の為びに
任那に寂せしかば天皇狭手彦に御ほせて任那をも
くはしめおひしは狭手彦かつま松浦佐用ひ免し
りふをうなの吾嬬のなごりをしそたりき山のこなのは

まて係歌を詠じ　額巾ぬぎもてたきゆくか○さし
まゐきてゐきしして山頂にかしはるがつゐに石に
ぞなりしなれど蒜葉に解ふくこゝを俟するにおよ
そへんくそはれんこんの川○なしこの史もてかゝはい
せとおりよめハ志らとしなるゝらしまやしゐんやう通
人くたの定理にしてだんかつとりてたじまるいて
ゝなる月令に四氣のうづらとくさしぬる博物志に
きしの蛇とくさしぬる皆ゐんやうきくもとうない
の志かるべき理こそ河里れ今その末のいさたしの

石になるさハ見えたるゝどもとうなの石になりしるゝ風
俗のとり沙汰にも佐用ひめ山のうさハきかぶるものがたり
にそもきしとし蒜信濃の國とかくし山へ
のほりけるがたくのゐんへゆくこゝろに比丘尼石といふ
める大石ありそのいはゝをさとくんにをつゝそぐれ
バさと人こゝへてたくのゐんこそとうなといふくも
まんせらゝる山なるに河まびとありてきえぎりのぼり
ありがわゝ見えゝ石にぞなりしることを九頭龍權
現さゐのうち乃世の人といましめるふなそろし

きまへいはゞんなりといひしを人へざるまじかるべきとのくまへバ
めりこおもふさもうちのくまゝにとて乞ら薬かひぬ。
さてこそ此をとうなしもやがて石みぞなりしめバ女ハ
ら其ハ比丘尼なりし○バ何石と名つけめやと問ければ
さと人のおしへてまれハみやたつしよのもの乃ハおのう
なも御免んなりとソふこそちうのかたよりきてる。
沙汰なりけれ
土西京雑記に霍光(くわくくわう)がつまつまんに二子をうみしまうして
けまへハ皆人うちよりたかまて此二子こそたしかう

のつかてなくてハうまれまじきしかれども胴胞(どうはう)つまんの
うまなれハ此たかひの伯仲うたがハしきまへといふ
かかる折から或る人の判断してうまれさきにうまれ
し子を弟とし後のちに生れし子をあにとし
其ゆゑハやどりし所をかまへかさまれバ前後の志だひ
あてきやうたがひとなるべしといふさまへハ又一人がいふ
てなんちかごろこそまなびしかうなし色物すて胎
児の伯仲なんどハ胞内(やだね)のうゑもなて断らべかりけれ
母乃胎内(おなか)にやどりし時うゑに付しうち児こそあにと

いたるしきとにましける児こそおとしいたるしやけ
理りてかんがへなれば胞内にて志もまほしけるなりの
こそさんりんにのそ迄るるのさきなしかハさきに生
まし児こそおとしなるべきとそ霍将軍どのはかり
此さつをとらずしてぜんやりのさきに生ましと
ゆかしとなるのろんにぞ志るさがいまぬ花に酔ふくく
こましを後ぢるにのらろやろにいふある胎内かみ志もの
くらゐりて小児乃伯仲とうちるなんどハさらに得ざれ
さえやりの大ひなるまりるとうなもほそのしるとて

いまろうなる雨ぐらなるに何まさ見まへ二子のまへ志るに
かされりしてしなるはうへの胎児の頸髏こそ母乃鳩尾に見
いるべきれば孕婦いりでうそのいろちのまりさりしめや
風俗のえりてこるにふさ子こそうなしば二子相なる
ひて同胞にしてあるなしかハさてこそぜんやろにいふある
さきに生まし子とゆかしなるとよしといふ
べりまし霍将軍どのもふさ子つしまるほどのおやじ
なれハこしきやなるさねくんとおぼえ侍りけり
日本紀に景行天皇二十八年播磨の稲目太郎ひ先を

立て皇后となし玉ふ時皇后小んしんまし御し
て一日に同胞の二皇子を多んぢやうにたいしましれ
ハ天皇こゝ玉をあやしこゝ玉ふて第一の御子を大碓
尊と名づけ玉ひ第二乃御子を小碓尊と名づけ第
玉ひしとぞ[illegible]に所ふてこゝ玉と後ぞるに此二
皇子こそ玉が國ふる子のかきに例しをあまたん玉へ
風俗の人にもかんやう和せざ玉ハ[illegible]いひとりだも子
ことつ事のなかりけるに稲目皇后のかゝる子こゝまでもふ
こそて[illegible]バさてこそ此天皇も霍將軍とのに

おとり玉ハぬ[illegible]きたハ[illegible]なりけるに[illegible]らきと
[illegible]かんかくなりぬ小碓尊こそ[illegible]
玉ふのりにハさうなきぶゆうの皇子となりけるに
日本武尊のみなりける
天中記に京雅翼を引て荊州の地多屋にいたんぬる
おとに田畝のうちをうかゞひ[illegible]バたまゝのごとき
ものゝ[illegible]なるがそのかゝき事石とひとしかりける民俗
此そのとまりてまいだねゆう思きしていとなみと
なし[illegible]がこれをてうかゝぬにうぐひすのひなあて

むしからとぬけて海中へさりぬるとそのぬけがらへを
又ほかの貝るいのむしの乃やとれる由へにぞ此貝乃名を
御とまふさんと名つけ多りとこうしへのかたりまる物
多るもてゐるにさてこそ詩経召南鵲巣篇に維鵲巣
ぬれは維鳩これにおもてといふめる鵲のふる巣あれば
鳩のきたりて此ふる巣にまとゝ多るむしより生
るい乃ゆさんはいくさぬをゐるべきれいま東都風俗の
人のぬけがらなんどはあれゐるべき戸板に紙もてにふさし
貼つけてまくらはゝゆきいくらんに土蔵つきうゐ

とへとぞ

吳越春秋に吳の国は辰にあれてそのくらね龍なれば
とて小城の南門上乃反羽におゐて両鯢鱙のかたら
いくまてゐやうかくにまゝとぞ宋書孝武帝本
紀に清暑殿のにしの乃いらかにあんちせられし
鴟尾のうちに嘉禾をなしゐるしやうどゐあり
蒔菜に酔ふくこれを後にぞ圖閣内傳の鯢鱙と
宋書の鴟尾こそいまの諸国の城楼甍瓦上にたてゐる
しやちほこともいふへきものゝや蝦夷記に蝦夷海と鞮靼

海とのあいだに鰈といふある魚あり此魚そのかたちハ
まことしきとりれどもそのうろハよくくじらとさね
さりとて鰈の字ハいまの比目のるに用ひこゝろ蝦夷海
の鰈ハくじらとさねもちゐるの猛魚なれバその字ハ
比目魚と同しけれども其乃魚ハ他国になきその
にてこれをしやちほこといひれんも志れやうさるにぞ
青緗雑記に海中に鯨魚といふものあんなるが虬尾鴟形
よくなるとてきあの魚をかしめたれバ漢の時栢梁
臺にてきねあり也打ちゝ越のかんなぎましなひ

のいふなりて建章宮の建れる時に鯨魚かかたち
つくりて屋脊にまふけられたるがいまの風俗の鯨吻
といふべきものなりんもそのさねハ志ねてべんじゝ○
あれいづれにも魚のうたちにくりて今をきねのまじ
なひしなしそる事なるものいなりのものへんなれ
ぬ国もてたるにハ鎮火臺にてもあれ也へやまもあ
のかりぬんかといふなりめバやのひ○にかくいうのしく
ひれふるへるまきねえんこしバさてそさうなりやの招
牌とやいふ也

十五 職人尽歌合にさる法ハしといふものの何もいまのこゝん
かんに世をとるさるまハしなんどもたゞ色たゞりに小
つきさしきめて神職かと物人ハたゞきうせぞ何き
人やもたゞへバつゞけるうつものことれ〻毎ご肖にた
へる包袱とするのこゝひきして三長月にいたることに武士
風しきの諸厩めぐりてつまし〻ぬかしのうさうたひ
ゆりてさるにハしやうぞくつけておどしめかたんぬ
まゞ包袱のうちより五色の帋と芦のかまてるとて
まいぐしにぎてはらりてるつなきゆるのきだにさし

はらさめるてるのゝあにあんせんといのまる事なりとぞ
菓に碎ゆくこまを読むるにきるのてるにんとも
といふある何の傳記にいで毎るにや文献せまき菓なれバ
いまたしかんなりび傳らざまども獨異志に江左の時大
將軍趙固がやしなへるてるのやこそて死し毎れバ固
いたくしまをかなしこゝぬるれバ郭璞座に傳りしに
免る將軍かなしこゝもふるまなりぬべしまきよく
はるをして蘇らしめんとて數十人にあはせて
牛のさねとりもてひがしの神べに申れる事 二十里

にしてひとつのけものを思ひしにそのかたち
さるのごとくなりしがことにしたりて死せるるのまへ
におきしかば此けものなほのあるまりまそくを呼吸
して死しそるる乃 路上につねく何りしほどに
やりて固かるの死せるがよそぎくり多くを何れ入るへ
東郡のけものことさるに似たりといふされは志つのさる
にハ何らさるにいま風俗のさる時ハしのむまやへいりこむ
さてこそさだかりのところちがひしかるハ本により
魚をとめぬかんとやいりんとしまれバさるかくぜに

ととしむかんなり

日本紀に雄略天皇二十二年ん七月丹波の国餘佐郡管
川の人に浦嶋子といふそのなりしか或る時ふ○に
乃至て水へんにつりそれ通にしおくたひなる亀川を
忽てくるにそのかめ一時によきをうなるへんけしてれば
やりて浦嶋子こころうごねて志まて夫妻多くんとち
かひしほどにつねに此をうなと相たびさくあ
にいま遅葉山にどのそひ仰りたるがその陽にさるとし
月ハ舎人親王にも志ろしめさしまじバこそ又志るし

玉りじて扶桑略記に浦嶋子こと雄略天皇二十二年の
あくて蓬莱山にいたりしが淳和天皇天長二年に
丹波の餘佐のふるさとにかへりきとぞ弟子に語りて
この事を後むかしに雄略天皇二十二年より淳和天皇天
長二年にいたりてそのとし月のかずをかぞへ三百
四十八年なりといへりや親王の薨じ玉ひしハ聖武天皇
天平七年にして日本記を撰し玉ひしハ元正天皇養老
四年の事なれバ淳和天皇の天長にいたりし玉ハ
事をしるし玉ハん百六年ののちにいかでか御書かきまへし

なかとなりし玉ふべき事もあらざりし扶桑略記の此説ハ
こと〴〵くしるしけれど三百四十八年のとしつきをかぞへしに
つもるおなじこそ亀と夫婦になりしも此さてをそれ
つはんかたくしかも決めかね玉の故でつかへ給とされ
し九風俗のそうお怪しも志まりめなり
北史焉耆国の傳に此国の人ハかんらんこのむものおほき
また貪吏の民の人々を死うまへんとて事とせる
ともかく小廿年といふてたいさまの鋪ひらきて嫗夫
ともにまさずとかしかんとしめて嚢中の錢とかへる

なんどいへるハまたてくるわを紀なるのいみしてう
ねしふ日似たれどもことらあてそとなみ名づくる事
ハむかしよりいひすぎきたりしび
謝肇淛五雑俎小鋪ひしのくてしへる妓女ありとぞ
してなづかなるところゑらるそしひとより出るとなく
しかみんらあるとちなくと土妓と名づけたり義菓
頼みてくるまを渡しるゝ大唐律に皇都とよきところ
雲南四川なんどのちめんに土らいんといふもの有けるが
ひてあやうのうちかく富豪の大ぞくをかね路

ちやうちんのかん来くいのおづけのやうまでとそげ
その皇都へ川ひる事なくて其の郷黨にとどまりや
くし傳達と土らくいんといふとぞ律の義ハ此も
のちやうちんの鴛列にハ敘しもそれともいなかのものまで
まことのらんにんなれハ土らくいんといへるなる五雑俎
土妓の義なれどもかんらまるつとめハ妓のことぎみちらひ
ハあん達ども鋪ひしある真妓たりとむしして郷黨に
とらやへやる妓あまたハ此土の字をんじ律の土くわんの
土の字の義にて同じりうちまでの餘乃俗話小説

なんどに真妓のことをば嫖子といひ土妓のことをば粉頭ともいへるなり己が國だにしまの通称とてもあるに見ゆへりいまの女郎大夫天神とよびなるハせるまことの妓女の先生にてたくさんやまの○こなんどいへるハさてこそ土妓のいめらなら色風俗のこゝろてんじて土妓のひそまりこそあるかくまが名つきて○こ茶屋なんどいふあるなけものやしれにぞまきらハし

宋書蕭惠明が伝に泰始のことじめ惠明呉興郡大守なりしに郡にまゝふたる下山のかしとにむかしの

頃羽のひやうしよりたる郡民のいひけるてぞ

に項王のしんまいハ津○にひやうにハ同しまゝにして此郡の廳事にそまゝにへバぜんごいくたくの大守さまくの人乃いたりあふも皆たそまして郡の廳事にのぼまるなんどなかりしとぞ惠明郡民のこゝを用ひおこして志ゆるんを廳事にまゝふけひんかくとまゝ○きしおかしふしぎや一人あのうけ一丈餘なるが由ことをたりやをさしたさこと惠明がたりてにむかふと見えしかあらまりにうせてゐるにぞ其のゝち數日に

して惠明背に疽のたつしてむなしくなりて
ゐることを項王びやうしんの人をなせる事なりとそ
梁昏蕭琛が傳に琛ハ惠明が從子なり武帝の天監
ゑんぢつゝくに吳興郡大守となりしか郡民も
さきに惠明がひやうしんのこゝめにころさまし をおそ
まてつけりて項ひやうの神の名をハ憤王と称し
なまるか祷請ともいはいぐんなるを押襲ともいはいぐん
をうけぬるといふことハ琛つゐに郡の廳事にのぼり
て牀幕をつゝ〇まゝ事て憤王のまゝ先に神座を

つくり公私の人をすゝして多福を祷請せしめこれ
おかゝる琛履をきなるゝ神座のまゝにいたるしが
室奥の室中にてそのさまかしくいふ叱りたる
こゑのしてそれハ琛がんしきをたげましいふある
なんぢしんもいこそいきて漢祖と中原にあらそふる
りなんぢして死して此廳にまゝよりぬる事つて
なき夫なりとてゐハ母ぐしく帳帷牀幕とうたる
ふて下山のひやうにぞうつしけるが憤王にもまゝあや
まてりとおもいまてるにやそのゝ所ハ廳にまゝしんもい

のくたいねがりつる事なんどなかりしとぞ蒼葉
に解ふくこまを後ぞるにむかしより鬼神の事
ことをなせる事 是が国とそもその例しのなんなる
後醍醐天皇建武のひようらんに新田義貞足利氏
のこゝめにうこまあひし 時義貞の子義興その父
の十三回法忌のつねぜんに足利氏をゆうじてくび
とり父のたゝくをむかんと江戸遠江なが館にまとまて
此るひそかにかくりあひしに江戸氏こころがたり
して足利家となりしかくへいなんどまふけて

義興をやぐらのことなりのふ○乃うちに何さむきこゝろ
せしが歳餘なりて江戸氏やぐちのほとりとぎこれ
ハ義興のまいかりうとかうかりまうせんをさしたる
まみなりしけの駿馬にまたがりて遠江なをおつかけ
あひしか江戸氏たひにおそまて馳驅してにけぬ
ふとてつねにするよりとりて血をたまうせてゆること義興
がんまいの冥誅になりしなる事 ねそろしき例しなりと
ふるき記録のものがたりにいとこゝろしるしなまども
ねよそ冥罰の所法こそ皆人のこゝろ罰なりしんや

なりしぬるわどに風俗のときほへなれ人へハ多ぐものおそ
ろしきにちろまとふかく神まうてるこうまとがら
さぬくのもの買ひくらふてたらいさめバ杉のかのこんひ
のときにし事にハこころつりだしてゆれかしぎや
きのふたひ祢にて食餌に魚ないのうつりがにくもなり
りんやりふこか山へのほまるにさてこそ神のとがし免
にたらいけまと巫祝のまつぐへして神と証さる
こそおりしれ書奥の蘭惠唯ハ項羽の志んまいに志ら
ひまて昔に疽をたつし従子の蘭深ハかへりて志ん

まいを志らうて自ぐらくざせなれども項羽も阿ふ
まらまいありと尺えてあらまなんどの沙汰なかり
き南史梁の臨汝侯猷の傳に猷ハ呉奥大なるし
此つ事に楚王ひやうしんとしまじたろまけのめるさて
に一斛をつくしてよろこひをきためられバ神形
にも酒色なりといふめるかくむつりし紀項王のまいなれ
ども此人のさけ乃む友とらしとなりしあるこそ神ハ称
宜のなりハしといふべけれ
神異経に南方にさしたる神の事人なるが祖身にして

その目こそいくじきにはきゆりそのかしたちやき
車ハ疾風のふきゆくいきほひのことくにてその名を
魁とぞ名つ事なりき此ものかしけるところの国こ
そたひにひぞうして赤地千里のたきひけんなれハ
つねにその名を旱母とハいふめれとし此母をとりへ
し人ハ何ゝんに涸のうちへなけいるれバまこやかに
死し身りとぞ蒸薬に砕ふくこれを後ぞるに旱
母のかんだせこそ目とたなのかいこをあれ人をへ尺の
ひ魚ハ風俗の人にもさらなきしくるしきうまれ乃

おふくろといふるしやうしその妍媸ハさもかしバ
あれ目のいくじきにかるにぞものしるにハさぞやふじ
申しなるめおよそ九竅四支のことのおよそてことなれ
ぬひしは此母のこゝにかきしめさてこそせこのくらハ
たなかあり烏賊魚のかしハ領にあるも松の六ぐりハ
忍ゝにかりしるのかしあしハがくやにかり
二十 桂海寰衡志に蜑人なるものハ海上に水居する蠻種
なりたいてねその俗小ゆすていふとなしてうこべにきこ
久まとしくともその志ゆるいぞ三ツのりけれ漁蜑といふハ

魚をとり蠔蜑といふハ蠔をとる木蜑といふハ山にいり
ざるをとりて世をくらしまるがその乃ミくふところのもの
とてハ皆かい中にもてかてとなりして生にて土地を
くらひ火志まくせもしの中にいりてよくこれ其こ乃
ものをとる事魚鼈の水に相ましまるがおもしくなり
二廣山谷のあいだなんとに居て州縣に隷せざるもの
こまを傖人といひ舟居せるものこまを蜑人といひ
岩居せるものこまを黎人といへりとぞ蒲萊に所謂
こまを後せるに范成大が所謂蜑人こそ崑崙人の大くさ

ひのもの小ぞ花の俗水にいりてよくこ魚鼈を生食
して火化のやしなひなきくなれバあまるへいげま
と雲のあ中をむぐりてとりいせるなきなひふ○のそこ
に何なりかりぬとしして世にとれるが此蜑人のも
いまんに長しあるにのまるにやことよりいげまとハ
かいくるのだんこくなまバその風俗のことなまるも
おもしろなれども虞衡志にのせる蜑人ハ中国かい
百人のみにして二廣山谷のあいだ州縣に隷せざる人
といふめる多しとき王化のおよへる中国にしかくやうち

のみわりまるものこそ[illegible]あやしこなりくバ
さてこそ東都たん[illegible]の徳化に浴せる人のうちにも
やとれしとやらん いふものハ松太郎にもぞくせる善七
にも[illegible]ハぞ園[illegible]にもげぢうあぢして[illegible]ぐるの
かたむきしむしろこも[illegible]にまとひむめだらのひとつ
りんぢんどつ[illegible]てたしのうへにおきふせいたく
しき申めのせとくまれものこそ又これを橋[illegible]と
いたゆしや

風俗醉茶夜談前編巻之五終

風俗醉茶夜談前編巻之七

東都　多羅福山人　戯撰

氣形門下第七

北條九代記に後二條帝徳治二祢んかまくらの北條貞時
[illegible]こくをあんきやしにふくこんりんのくらしになる
ひに州郡志ゆごしりくのよしあしをかんぢしらふ
ゐるに一日城南の離宮をとぎ[illegible]時民家にいりて水
こひのこゑもしかしそのとしのみをぢ
ちりれ男のよしハしゐしくりんぎよもつゆるなり

されしむかしかたりにぞ茲に禅かくれしとき
其世のとき北條時頼といひしは最明寺
入道と称しもはら志をとくとあんぎやして国々の
くらし剃髪のよしあしをみんとてめぐりしに
あづまぢの佐野のわたりの雪にゆきくれ源左衛門
ともしやどかりけるにあるじこころよくもてなして
物のなきまゝにかくしもちたる兼又なく馬武具
ありしかともかくのごとくおちぶれしあとは
いらんことゝもいつまでもつとめ申さんと
せんと申しけるのかぎりしかひおきし梅櫻
松のはちの木をきりてもてなしの夜さむを
なぐさめしことをも入道ふかくおもひ給ひけれは
のちにめしいだされ一かどのはうびとて三ヶ庄の
ちぎやうをたまはりしとかたりつたへし此うつゝの記録なけれ
ばしれがたししかし東鑑に時頼といひつたへしは
乃ち弘長三年之の記録のみなるとはいふべし此
あそんのありしの事をもあつかふや時頼貞時二世相
つゞいて天下をあづかりしとは貞時の[illegible]離宮

にかくし通基ときこしめしてを時頼あんぎやの
るとえさへして佐野源左衛門といふものゝ
人のきいあつくろひぬるおもむきをとくより最明寺
入道は裡すゝぬハあつま木としていぶせきいて
きしあらじむかし韓の昭侯の臣下を御しあふにし
古き袴のおしへみし人主ハ一顰一笑をも惜しみと
のまふにおもしろく天下を御しるゝ時頼のまつ
りごとに三本のうゑ木のかはりに三ヶの庄のとんちやう
とハさてゝそうりふとめをつけるとそうせしいかや

ゆるのきくありしかやうの時代の風俗のとゝのほりしく
うそくはりにあつらへんハへるしん後世なればそとく
さわらにきざくしあるゐるすなかれ
獨斷に海中に度朔の山といふ此のありつるゝそのうへに
大いなるとくの木ありしに枝根とんをつとちのとを
きるの三千里におよびしゝそのひくきのかたしゑだの
東北に鬼門とて萬鬼の出入する門ありその門に
儋牙帰といふつるけきとしゝ神荼鬱壘といふ二
神のよし淘してかんかえしものい諸鬼の閲

つくるゝ世のまぎはねをなしぬる鬼ある時し
にハ此二神葦のなるとそその鬼を志ぐりて儋牙帝
にそしゝてこれとくらハしめんそうとこの田へそ
世俗十二月先臘の事にあらねしく此鬼を驅除
し茶壘二神のうちゑきく葦索をそへてとん
こにかけ疫鬼をいけるとぞ蒼葉に醉ふくこれと
談するにあらそ人ゑ東北のまゝの地を鬼門といふ
てこれといふぞんぞやうんとまつりて惡鬼ぬけふ
るるん度雖山上の鬼門とうおこれるなるひなるしされハこそ

茶壘二神もかれ地にまし海しく疫鬼つくるゝ
まふと漢の時よりいひつくんぐるこそ久しき例し
なりまゝ國の神祇にはし海牛臥天王ハやくぞん
のつくるゝと皆人かつぐしけるぬるれいそれの
あんなるし備後風土記にむかし素盞烏尊南海のと
うなるとよばひにしあるに時日ゐるしく蘇民将来巨
旦将来ゑやうだねがをとにいくらくやとかりまふ時
ねとしの巨旦将来尊にゆるしまとしこのうちの
蘇民将来尊の御やとゆるまくたのハがうと神座に

なしあハの飯をもてなしけれバなる所なりといへり
ずといへり されバ神代外録にもむかしなるの蘇民が
子孫にやとかく侍しゆゑ時しよその事あるとて
きハ天下におこるをしらハなる蘇民のやどし
あるところがしにかんしもふるゑきれいのちの
りとなりけるのまつりハ茅の輪つくりてとびなりめハ
あるハいふそいうしよもしはしとく時をし蘇民将来
ハいゑのこ茅の輪をとびならハそのこぎりおとさめるなし
をもとも祇園縁起にてんぢくの北に九相といふ国

なりつるが其の國に國あり吉祥といふなん其の國に
城ありて其の城に王のましまし牛頭天王と称
し又武塔天神と称し[illegible]あまたへ
三代實録に清和天皇貞觀八年七月十三日素盞烏
神に從五位下をさつけまつりけるを牛頭天皇
とも武塔天神ともいふなり素盞烏尊とぞなりけるは
しなり[illegible]凡俗には茶羅二神の
ちかうゑかげまうしけんをなされたり疫鬼を追ひその國の
凡俗ハ蘇民将来之子孫なりといふ[illegible]

ゐるさそこそやくひやくいふまゐの名字本家牛ひ天
王小さきとうつぎとうろしいふくもようしを
前漢書に武帝の戻太子を廃しむふは巫蠱の事
ようなりしとやそのむかつ婦人の媚道厭魅のこ
ゝく人をのろへるむやいふるう隋志に蠱むかつ物なる
とのは江南志にぐん徃ゝにあんなれともとうけ冥
春の地なんとに此むかつ志ゆきる人をそ物ほうけう蠱
の神をひきぬる志かつは音音にひやくむかのむし
とうあつめて犬蠱は蛇をかきうとれし小蠱は志らしを

かきうとれしけるこもとひとりのうつものなるにむの
物きくなるがひにくしはしめなるにその中にくとろく
のむしにくしひらくのうしのむしとうて
こもしを蠱志かつの神となるなり志やなれはこれを
蛇蠱といひ志しをなるしはこれを蝨蠱といふく此
むしはふく人のろひなんとする時にはそのくの
とそ此むしに合しゐるにその蠱神をちかしに
そののろけを人のそこにいるを五さしをくひつくし
なれはその人をそ一時にむなしくなりけるほとにその

隋志の蠱神にのまうるなるにぞ今は俗のあくぎに
よりんいもしもしたる男かさなるにとしとぎらんとさけに
ひくまにさしめやさらしめとことくなれむしつ
のなんおいして今これはなきかきれつんとし
ゆりへは歯ぬけおやじの水をしくしくるごとくにて
あもしろしへさうくきもうのうちは此をしなんと又
蠱女(ことよ)とやいふなし

日本紀に推古天皇九年三月聖徳太子志やらだいの
こちをさしかへて民としてほしきものしやけと

志しのあふれしこしめて蛭子(ひるこ)のもわくとあが
めて志やらだい鎮護の神となし　ゑへらとそ蒼茫に
醉ふくこもを該ほうにせぞくの恩しまた三郎と称し
て遺像(いざう)つくもうそのかたちにおそいぎに志やの以俗に
てつアさほととら鯛の魚をきてきよりうちひこしい
ちふきるなり列仙傳にむかし殷(いん)の時呂尚(りよしやう)といふ
めうおんしやの南山にかくもして下溪(けい)に清ふれしか
大いなり鯉魚つりはしにそのたしひしきこそがれ
ハ兵鈴(へいりん)のふしぐへんあらつるとぞ後世ぐそこ乃

呂尚をゑがける事ハ國の蛭子のさまにのまうをやゑぐ
そのつまり魚にて鯛と鯉とハさまかりのちかひなれさて
こそ殷の世の呂尚ハまよふくの兵鈴六ぺんを得て
帝王の師となり神代の蛭子ハ鯛の魚いまゐて志ゆ
ぐい鎮護の神と申しもひふとあまひ又ゑ小田原
町に魚うまる男ハ一二三四五六七八九十なんとのあ
まれひ口ハこれ又鯛のうしなりいぞうひしにまやむ
つかしまゐ志んの祢ごとなり
劉向説苑にひかし宓子賤ハ孔門の弟子なり單父

の宰となりてにんしまにおりしかんとせし時陽畫と
いへる賢者のもとにいたりて單父にゆかるに
吾子亦贈言のことはしけせまじやとのうしほど
に畫ちくこゝにまいハとしまかりしより此
身にしなりしハ民おさしらるゝとなりて志ゆ
ゑやたゞ事がおぼへ得たりし志ゆつにハ魚をつまる
のうちふたりありけれいまけうちとて君ハ單父ハ
宰ゑとおくしのやといふれハ子賤又問ふて吾子
ハ魚つまりうちうそさまかりにひこりのありはるや

きぬはしはもしとたつのけれハ晝つかたはくのうち
こそしおいていふあやうの論ことひわしゑたまはじ
へひふへそうれとをつみつ魚なそ陽橋なれをのつき
やまつゆやられ魚なれともをのがなひそてうす
くしくして義なくさうなものの存はらかごとく己なるか
さとくしなかふごとくなハまなかこともし魚なそ鰟なる
そのはやかごとくゆかゞきし魚なれともそのあらハひそ
ひろくしてあつかうさしそぞ義蓋に解かくれし
へ經なるに君子小人のちうものうさ世にもまなるや

鰟陽橋のみなまとりたてならぬくあさけ於る川のうなれ
みうきまつくぬる人のうらにもあるハ君子となる
にごるハ小人となんぬ道とも於れしぢんのあるにちが
ひふれとそ鰟とハ陽橋といふうてもひとしく水に
むなるをすべしおすらしくもあそうそ郷里に寧うち
人なるハ君子小人をゆゑにしておるも人なる漁をその
つまうふなく鰟と陽橋とてまうてるがごとくなる
論語述而篇に聖人の君子小人のこうろ校をゆけ
しておししへにいふ八うとまゆる君子ハうといくかし

て蕩々たり小人ハとこしなへに戚(せき)々たり
し朱文公乃註に程子のせつをひかれたるに君子
の心ハおのづからゆたかなり理にしたがふゆへ外物にひか
ふしうつらひをもとむるこゝろはつねに蕩々との
ひやかなりといふ小人の心ハ又それにつかはれ外物に
役(えき)せらるゝ故に名をもとむる時ハ名のためにつかはるゝを
役せられ利をもとむるときハ利のためにつかはれて
役せられ心やすむひまなくこゝろはつねに戚々としてうれへ
となりかくれども此やうなるものを抑そも天子諸侯の

とみたる賤男ハ中なか抑それむかしの諸国
諸家の家老どもの郡代どもの代官どもの志ゆくつ
とめしあやまりそやかくとるとハ八十の翁目
ぐるしくしまこゝろしたかふ事ことし
それのみかごとくしく文字のすへハえてこれをも
いつか八十万人いつか入土用入しみのハえてへら
ごとくみくひろれ諸州郡にて長(とき)ろうまれバ千里鏡(とどめる)の
あまたけならいかるそ遠の諸士諸民のよし
あしらへぎけらく(せどぞ)やうなるにかくとんちやさハ

もろこしのかみとよをこえし多く聖賢のいでたる国
のことなれば初まるよりも孔子が經書のぜんぐく
おこしこ天みずしめぐりて日本国をよりもあまたある
人ものとあり支へ陽畫かつきのころとて民もまぬ
あかいろの貧富も又よくてかつめむかしハ何ごとも
穿ける人のたびかさなるにこれもいけどもかくいくしまで
じんせるおもひすゝみ今の風俗をバかつせんのことよくよ
見えしくいまはいあり人のうびあるる国の人まりそれ乃
くるのおそろしかるべきことゝへまをしさきのもとし陽橋魚の

利口つかまつりでかぐんのかくるはごできんをきとられし
宋史に徽宗皇帝建中靖国元年遼の女真の節度
使完顔阿骨打使をしてはめいきんの海東青を
こうぎしてあるき此をつかのかうをとりえしまゐれ
どもぐあのかねとらんやかみしもよし天鵝をとらえさせ
ものありて女真のめいきんかくそのつめをもちとと上りし
とあもちり薪菜に採かくころしを遠まる日本紀
に仁徳天皇四十三年依網屯倉阿弭古といふ人めづらし
きとりをとらへて天皇に久んじくりれバ天皇百済国の

酒君をめされて問ひ玉ふに酒君申しけらくは
此とりは百済にいと多かるとりにて名を倶知と
いふなりと申しけるかくつばさつくりしものなりとぞいふなる
とりなるのまたやうなることもありとぞ國史のしるさるし
ところをそへたるに此ところぞ北殊のさへめつらしくばつかね
あやしとしのちゑにいそしむるをもあはれみしのち
やむごと信使のへいづつにとくしのゝゑかるゑどもい
もの女真より宋へうつぼやし海東青のたぐひあるといふ
くにゝ國のめしゑびんに海東青のまなつけく隼とぞ

然れはかかるものゝびんぎにまでやまとはいふくゑ名ありけ
りしをもとめしは職原鈔隼人司の條に此司
いにしへ衛門府のぞくしにあ平城天皇大同
三年ゑしめて兵部省に隷しめられてむかしは
大隅薩摩の人どもしこにまゐりてゐのこと
がきこえてそれはみちよりてね此人とつ
さだめちかしをかたらくゝしと隼人司といふ
此司を隼人とよぶ事はかの國の人をめしてや
ぬるに彼れは隼人といひつるやをのいかく海東

青のこゝろをよむにハイトンチンとなんぬるハ隼人の俵訓
なんと此そしなんがなるもうつもあるにぞさてこそ俵漢
のなんのこんざりしそう徑山寺納豆簟笥扇子雪踏
挑灯の文字なんど徑山ハこゝなんかく寺ハ俵なんなり
納ハこゝなんかく豆ハ俵なんなり簟笥ハなしなんかく
扇子ハなしなんと俵なんのましハもるなり雪ハ俵
なんかく踏ハそしなんなり挑ハ俵なんかく灯ハこゝ
なんのこゝひこなくにこつもハかゝる世の中のなしひの
さんかゝなをよきむもしもあしをなどらに化せしるれハ

又そのなしひをせねとなんぬる論語のみこのあるを御
いましあこそ聖賢のこゝろになしいるハだんぬもいひ
しか聖賢のせねに化せへきとのとてもみこへ代俗の
うもひくうこの云の葉ゆもくまとの木ハ石になるうう
どハ木になるなんよく

元史に蒙古の鉄木真かつくせねいきとせいぞつし
て忻都国にいくりしかハてつとんくハんをとぎしく
侍衛せるとのとみはるにひとつの奇なるけとの、鹿のかく
ちに馬の尾ありしそこ見えこゝろのいろかしていたるに

ひとつの角あるがごとく人語をなしていふあるなんだがとも
うしはいふへき人にあらんとしてうまうへしも
鉄木真ことをあやしこれ臣耶律楚材をよびて
此のたつのれは耶律氏がこゝろにこれをてんぢく
のけとのみにその名を角端といふあれよく四夷の
言語解しあるとのみにこのかね人ころもるをと
いそくにかくあるとのみをいまをいぐん雨にかねぐつし
ひつ事こゝに四のん上天にして陛下の人ころもるを
とあしめるとみくこゝろふ此祥とぞんせしめあるみや

と鉄木真がかねいきをかねぐつせしるは宋の寧宗嘉
定十五のんにあらんとぞ蒙系に辞ふくこれを後にて
鳥獣みく人語を解しぬる鸚鵡猩しのあくひ小戴記
のふるきぬるみにしこれは角端の人語解し
こゝろ地とろくへきにあらさしめことよりてんぢくみなそ
きねのけとの地ほくしく由をとしてくことのとなし
そしにまれこのつきうるんとめつくかるるといふ
べけれこそこそ地くんとの駝鳥の火をくひ風鳥の
れをくへるこゝろのきね地ほくりけるはをんこくの

るしいるりしあるしこれへ東都の徳化あまねき
れ俗にむすめんとうまくしまくとしなるとの
こそ申めんくしいりけりぬるゝ獣よりはいかとのく
いの人あれ

官職秘鈔に齋宮寮齋院司の御所は皆令外(まうげ)のくは
んなり寮ひはまんぐらこれに任ぜ其人なりけれは
諸太夫といへともこれに任ぜ院司のちやくんなし
とも任ぜ人は寮のひのごとくなりし職原鈔に此ぞ
ひのくはんにはあらめらのこれへまとのなかりしと續日本

紀に文武天皇大宝元年八月そしめて齋宮の
くはんを寮に准せらる聖武天皇神亀四年八月その
くはんぞく百二十一人を補せらるゝ其事に解く
せられしと後にしるにはいあしへ齋宮の伊勢にくらし
ひ此時しには天皇御手づから櫛とりましゝ
齋宮の御所(うしら)にさしこまんしてのちにこそこの
かんゆとむくるなれしさきにはこれ此櫛のるゝ名づけ
てまうもの櫛とはいふあれ或るせつに櫛はむまれなり
をとれぬらしのなれは此ゑんとりてアぐけにいやし

せりと又或はせつにハ此櫛のむすほせしをとゝきぬるご
とくにそゝびのこゝろしのとゞさぬるなりしるすしきく
せりとそ源氏物語繪あハせの巻のうたにも見れ路し
そへし小櫛(かぐし)をかことにしてそゝなれなるに神やいさめん
とよめるもいとしきこゝろなれ齋宮此櫛をそこにいれ
むかへく伊勢の櫛田川(くしだがハ)になりしむかへなりとそ
しりもとも鳥羽帝このうたハ齋宮のるのあそんなりにや
西行法師のうたにいつかまた齋(いつき)のこゝやのいつかもて志めの
御内(ごうち)のちりとそゝくハんと詠せり云の集なんと此るの

をえらるにうたかハしそのゝちにハ齋宮の名あるし
かども伊勢にハくらりむハさりけり又賀茂の齋院(さゐ)ハ嵯
峨天皇弘仁九年五月そしめて皇女有智子(うちし)内親王
をいく齋院となし云ひしと此例のおこれるしめハ
平城天皇と嵯峨天皇と法なる和しむハぞしく
らんにおよそもむかしかハ嵯峨天皇法きぐハんあるく
賀茂の齋院をおきむかしとそそのゝち土御門帝
元久の頃後鳥羽帝の皇女礼子内親王をいく齋院と
なしむかしるのありつるかしのちつゐに齋宮齋院

神祇なりめそむかしハ此かきかへも三回こゝより齋院
のくらりむかふのかハ三しくのともいまゆしハ祢宜のむ
ものと志ほしかきめしく齋院にそなふるよし此俗の
云にハ齋院とハいまぞしく御とのいまゐと称し
なり神のおくさ国のなのなりとさしやきかくりきりもしりハ
これそせしぞ□のうまる国といふへし
開天遺事におもそ人家によろこハしき事ありけれ
ハなるしかさしきのをんてゐるあり門ゆりさそ見て吉
なのよしと志ぐせしと 温公通鑑に唐の徳宗の時

主威相とろへてけんへい臣下に侮してけれハ度支轉運
使竇参といふ人をね志り陰狡かしてけんをしのこ
とをしさほきるほとに朝士の迁除あるわかしほハあら
りし也 迁除の申議申周を志りして陰もしる人
に報しきしやそて賄賂ゆきてけれハ時の人これを名
つけて喜鵲といふりとそ蒔葉に醉ふくこれを
詠せるに鵲の吉事と報して人ゆゑあつまりさそ
げらいまの世のよろこびかしんと同しけれむかし
より官にねくけんとして賄賂をまゆけるあきえ

人情のかゝる同のくらゐなるしのまゐらしにうきまゐや
法門無所之せられ所源志のいそうと人とまうにハ
しむとうのまゐしらしてはなりもとうの
ほしまたまうこひがらしてつとむるとのと風俗のいひ
まうハしくはいそひとうと名つけ事れハさそとそ
その部にいもんもまうしも
陸璣草木疏に蜮ハ一ツの名ハ射影或ひハ含沙ともいふ
めもし江淮の水中にねほうるもむしなりまし人のかたべ
に申うかそのかげ水にうつろへバ此むし氣をそれく

そのかげを射てうけ時にその人なんそくしにむなしく
なりたれハ南人もこれをおそれて水にいりなんとする
なるあれハまつ石かけるんとあるなけいもて水のふ
ちうくかげのうつろハざるをうかゞぬくあるいうとそ
埤雅に蜮一ツの名ハ射工けむしなぶれ角あるくちに
よてうハもるなり弩擔のごとくにくそのそれを矢と
なしあるのいまほひにごとくしにて人を射し田へ
こもしと水弩とハ名つけそうとそ蓋案に解ふくれ
を該ぎるに洪範五行傳に蜮こそ南越の地におほ

はじめらるもいやものを化して子規となりて人をね
との情をとりのこゝろにとどめて不如帰去来とちらやを
ひらびなれはけびしうと萩菓に酔ふくこれを詩を
ふに周易繫辞傳に遊魂変をなれといふあり朱文公
本義にねんさいやうれあつまりて物となるは神ののぶ
ふなり魂遊し魄くだりてさんしく変をなるは鬼の
帰をなりと此云とてしるはねんやうの一つ地に
あらそうの落花秋の揺落する人間のちかく目にさへ
ぎり遊魂の変といふへれ京房易傳にも遊魂帰魄と

いふものあり八卦ゆのく八変をれへて八八六十四卦に変を
ふこれと遊魂といふものをれ変きくなりぬるは乾魂
ととのぶんやしに帰し坤はととのぶんねんに帰をる
これと帰魂といふのも聖人卦畫のうふときおしへも
その帰をるにいたりまぐはかく変なくてはかなりまじい
そんや人の死しく冤魂の帰をるところなきなり変
なるんもことゝなるは日ゝ國にても此なるれなしも
ぬるぎり秦の武文が蟹と化しぬるやうもかんど
かしのぬつの志しくし化しぬる帰をへきとしろ

説苑ニ孔子の御云のよし
あるそうの名を螳(カマキリ)とき
ふの名を以けるあ
ふ社つそうそうあるふうの

そうのそうの雨よ
ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

そうのそうの雨よ
ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

ふくそうそうあるも又
路(ミチ)ハ汶(ブン)と考工記ニ鷃鴿(クキ)ハ済(サイ)と
しそうるめそれも
るもいそうそうふ
ふそうそうあ

地気のふう
のこと
やなしぶけ
ふ

あしよわきものをたすけぬるを蛩々と巨虚といふものあり
けだものなり。ちゝかけくろゝらん時のたより
なるし。はなくはしりのけだものとゆきしかたき
なるゆゑによくかけも蟨が立うしろにて耳草ゆへて
くわせけるなり。蛩々と巨虚とを はなしさらじと
くらふしとゝめ 猟人のけだものおそふ時をいたはれ
ことに蛩々巨虚の二獣とのゝ負なし といふもれし
て蟨をおほしまとはせてまかするに 蟨がつる
つるものかくしてくらしてまにはせてる

ゆへなしとかやう蟨はそのたすけ蛩々とけだものと
あひなれるあるよし はなしさりてたすけらん
ゆゑのなかくことなれ 蛩々巨虚は蟨とあいしなる
ことひとしもはなれ あしきを耳草のとをまかせてなれ
はなされかくつきあへらんは さらるを可愛かくるる
ことを務めて孫ふりて其身を残さるる世の中の人
とつゐて友をけしみしれ負うていゆともとめにぞ
似るものゝこゝろがまゝの世のなかもあらぬ人の
ちえ人ともまかせも同し 不徳の匹夫なりとも世にて

越絶書外傳にむかし申胥が呉王をいさめていふある
ほずものかべにまとめつゝあるんぬるはそのかべのさ
しはしのまとはしたるとも かべこそは称すもの朝な
夕なつめとてかきぬるとなどるまとはしめやいふ
呉人は越をまとはしたるとも越人こそ呉をはなとる
まとはしごとめやとぞ 荘子に解ふことを強とる
にぬるをなしのつゝとなるものせんとなれ 津
しむへきるぞかし 孔子家語に小人とはいる
人は鮑魚のいちくにいまるかごとく久しくしてそ

のくさきとまとはしるは何しきこちに化しる
まとはしなり 君子とはいふ人は芝蘭のしけり
いまるかごとく久しくして又そのかほりとまとはし
ぬるはよりもこちに化しとるまとはしなりこそ 孟子盡
心篇の過化存神の妙ゆるはいまし志りしるとあるも
こんなに荘子にも魚は江湖に相まとはし人はだしぶかり
におまとはしいふあるに又そのなんの道に化しる
まとはしなり 飛燕外傳に飛燕がむかしさしけきぬ
ややのつましくにいとふと合徳としてあるのさるの

いざかしゆへたる事ことなれ多くやとハさてこそおご
ことの長してまつしき以前しへきやうあねのよし
ことをまてたるこすもしなるとにかくにそのことなれ多ハ
そだ[illegible]のことをもしらぬんぞ久やうなれ凡俗のこやつ
久きいなかをうなのとしつゝ江戸にまてそれ
ハしきあしのとしあんぐいをうたきしたるハ水道井
戸のあるに化しあることもしなるかくとろくのことを
もしのおほき中にもこれをしきとのハ義理とぬ
んどふしとしてうけあまいるにかのちうなる人の

おのか私慾にゆへて不忠となし大節はのちんぐ
えかるくもうえハもしるハ童恩をこともしるのこるら
まてふぐてまぐこれより男か那
太公陰符経にその人をあいまたるとのハ屋上のかくれ
をうみその人をかくめるとのハ餘胥をかくめるとそ
蒋侯に辟ふくこもしを該まるに愛憎のことくしに
よもしるむかしもいまも同しけれ韓非子に彌子瑕
ハ衛の美男子なりそのいろさんなりし時いけハ
て君のくるゆにのこそ世のやまひ同ふるに君きにし

見しく弥子ハ孝なるハ所母の為めのゆへにあしき
らるゝはしとおもひし又君とくぐとのそのにあそ
んでもくふくあまかりけれハそのとしとて君す
なりたるか君又おほせて弥子ハ[illegible]とあいたるか所
そのにやしるふるとこそ[illegible]とおもへりと
までにしてそのいろ[illegible]ゆるつゝと云
にほうしほとにその附君のとほせにかはひしし
いつとてまかりたるに乃ち又かつてこれにくらハし
ひるにそのあまりとしとてせうしいうまいしを

あもしへ弥子かおもひハむかしにたがふるなれ
ともそのいろのさかんなるとおもひ[illegible]
愛と憎とのかくそやまくへんしぬるの[illegible]
[illegible]ようも甚しきかや愛憎の地におもふ
人[illegible]君にしにはしくおもひ[illegible]
かの愛のかくまに[illegible]ばし憎の餘胥にはまへら太公の時し
ようあるふも為の人情にそてそて凡俗のしかも又
いふばかりをかくれハ袈裟まてかくしし
戦国策に魏の安釐王龍陽君をちよしあいしく

し専房のちからを出しまさして人主も抑えて
おもしろいといひるは姉けねの人なる風俗のなひ
にいろを漁する淫夫はあるとも龍陽君ことに人は
あいを漁するものといふへけれさそこそそのこの以
ゐるに気槩ある人はをとなしいふにこのび
ざる云なるにあるに見るへるなるにちからをとしるは
相むしそむしさむしくれのゐくひあてうつりやを
きいろとて世をうるはさまへのほうのをうるにこりの
ひかりとぞそのかなり

唐六典に諸監馬印といふるのあり抑よそ諸監の馬駒
に印するには小官字の印とて左膊に抑んし年
紀干支の印とて右膊に抑んし監名左右扇の印
とて尾側に抑んするのよしはしそんなる尚乗へ
ゑに擬するものは監名を抑んする事なし二歳の
起脊にいくりそのまやしぶやくをかくやしやく
に飛字の印とて又その右膊に抑んするなり細馬次
馬にはともに龍形の印とて項左に抑んするその尚乗
へ抑くるへきものは尾側に抑ねく左右肩の印によりて

三花とそこえかんしぬるの餘雜馬上乘のことハ風
字の市とて左轉にかえし花字の市とて右轉
ふそかんせられ此諸市とてるいしんのつらなるいくべつ
志かまいれてろとのにハ文物のしるしよいうる
とこれの豐名の市とて左頬にかえるる功ゐそ
官馬の人にたまハりそれのハ賜字の市とそしいよ
いたすしんなるかし　でんえなるあそりてそのハ
出字の市とてするしいよ右頬にかんせるるるの戎
狄諸番の馬市ハそのしるのかしらにきしくかく

市識とそなし作りぬ回紇なんとの馬市ハ南手以南
の文字とてそれ市せるるう諸戎狄とえても多おかい
けてしいるう回紇より馬とそ中國にきうて互市
なせる時にハそのしるしてりるよ
中國その馬とえのしくミヶ國の市とそしてりるよ
しえん國の市とそその馬にかんせらるそ義朶に
勝ふくもりと說えるに史記平準書に天の用ハ龍に
志くハるし地の用ハ馬にしくハなしと功なそ　軍
匠の利用とつりたる車服任載耕獲傳遞乃事う

おゐて馬なくはなどるそのものなりぬへきや六典
下馬のせね唐人のこゝろを馬政にとらせ申るすなを
見るへけれ為しその逸足のことはハ為すきぬしかも志
しかく幽冀玄朔のかんまやしのさんこそよはめでし
吐番の茶馬市なんとはくきんの一るとくく中國に
きたり神州の薬とはゝ忍れ互市とするの回紇の
市馬とそのせねもい同しけれ其國とそもむかし
ハ事政をおとんしてふ例しにこまむかんそていしじ
ぎ志れとくのあんなれ大貳三位の奇に桐坂のせれの

いてかしふるしし山とらせ桐ハくのこゝろしよある
桐坂のせきハ近江の國の山こえかし桐ハくハ信濃の国
の地名なりとゝより信濃ハ山とのかんきやしすきハ
よりしるさんせうこそ回紇吐番の馬いてきりに同しけれ
此式八月にはこるけれとうるかや紀貫之の旁て
桐坂のせれの志ゝ門よりけんとくいやいくらん空月の
こゝろしよある此空月ハまきの名なれとも十五夜の
月を空月といふ志んとしたりの旁あそ八月におこるけれ
なるとこゝろべけれそのこゝろをもて国ハ信濃の桐ハくのて

にかきこうかう八月十七日には申斐の國福塩のこゝろと
獻し 昔には武藏の國小野のこゝろと獻し 昔
には信濃の國 [illegible]月のこゝろと獻まうし 延喜式左右
馬寮の式ならひに年中行事 [illegible]合の詞に見へ侍り
ぬるのほか 正月七日ゆゑ 御馬御覽せしかゝるを
白馬節會といふ 河海抄に白馬を 馬の本性
なれはかくいふとも 文德實錄に仁壽二年正月七日
天皇豐樂院に [illegible] 青馬を見いらん
[illegible] 公事根元に

白馬節會のことを 青馬節會とも申とさへし
[illegible] 青馬を見いらんあるにより ぬるのなるゆゑ 礼記月
令に 天子青陽の左个に居て 鳶路にのぞ 蒼龍に
駕し [illegible] 此蒼龍は驄馬のなるゆゑ 驄馬は公事
根源にいでゝ 青馬なるゆゑ 寛平御記に 礼記には青
馬七匹を用ゆと 御馬本數二十一匹を [illegible]は
三ハ陽の義 七ハ日の義にすりて 三七二十一匹なるゆゑ 江次
第に [illegible]の御馬二十一匹毎年 左右馬寮をのく十
匹ゆゑ [illegible] 一馬をは餘馬といふ

隔(やく)どしに両寮より毎ぐしにまちもとをまもりなりと
日本紀に天武天皇十年正月七日天皇小安殿に御(ぎよ)
しきこしんくらゐの儀をおこなはせ給ふよしこれ白
馬節會のらんしやうなるしか江次第抄に小安殿ハ太
極殿の後房なりとぞとろくのゆるをふくにはこれ
いにしへ此さしきをあはしたるへ此ものの天皇も馬政を
おとんじつかさしたまふすこしもあふかしけれ近世享保
の朝齋藤をもかしにおほせて南部せんさゐおしんぐ
乃ちさしやのそのむまをしまして房州にて牧(まき)に

いまさきまひし　時その母馬のうしろ二海にハとのく
くぐんの市識をそなさしめんたふ南部の母馬のうし
ゐる二海にハ(そとうしのこ)の市識をなしめんぐゐの母馬のうみ
そうこゐにハ(つるのまがく)の市識をなし　そうしやの母馬の
うしろこゐにハ(とびすのこ)の市識をなし　本国にて牧とかの
母馬のうしゐる二海にハ安(あん)のこのとて市識となさし
然るにこれを六典のこゝにはよりしるゐきちゐでとかる
へかれそのほか小子ゐるゐがやのくんばくのむしれも
としくそのたんそくとかんがへて逸足をおほし

ひかるのこと又馬政の國ゆゑにやうしゆるしゆゑ
さてこそ風俗のことてこそしてまゐるの福ちゑと
名つけそろゆんさわこそゆゑのことんくにいそろゆく
[illegible]まゝゆゑば殿さゐもごとれしが奥さゐもごとれ
とて

羅山渉獵集 [illegible]のこそ志なかれはさりといの志との
るりとそ首京に殿ふくさりと後ぞるに抑そ
どうぶつねめしの抑これはしとのごとにつきてゆゑり
き三ゐ八ツがしそのでんといんともひとしく一ぞ

二めしのこと人のなりゆんにいもうひじこそさぞあ
てゆゑげるりん このとおもしんなかんのあし
ハ伊勢のこゑをおゆくゆきゆゑ志るゆんとハどろ
ばらの事なるこづくきのゆんとのともハ志ほら
しくきこゑなりをさてこそみそしひとゆし
のゆこしきゆしゆるりの風俗の云ゆしさろよ
げなる人のるゆゑくゆゑ人といふある 駿子
のねめしゆく 妓女の志んぞつといふはうそのふがそう
とゆりそれなる

唐書に則天后長壽元年試宦といふものおこりて
人の賢と不賢を問ふものなくこやづくことしたる
そのある時ハことくくぬきんぐあるくらんとさげけ
ひつくしハ時の人のことにしく補闕連車載拾遺平
斗量。櫂推侍御史盌脱校書郎といふ事を
醉ふくこれを詩にしたるに容齋随筆に補闕拾遺の二句
ハ張鷟かこれ案なりと尓雅釈名に齋魯のあいた四
歯の把を名づけて櫂といふのも推の字ハ此ところ
にくハ吐雷のうへしまるうくこのことにあるといふ

字義なり盌脱といふ字義ハ東坡集に但信積蔵終自
售豈知盌脱本無摸とはしらもしらず詩とてみるし
盌脱こそ盌の摸をつくりくものと套してそのかたら
をしらぬき贋なるがかたらハいかなれ似たるとも
まぬ。ぶりなれをそこもる義なく選擧のこゝろを
かしくそのうりしなれ人のひるしくその名を
おかしたる事なるなれ風俗のこやつ人のこゝろに
いそがハしきともがらのいまだ地のがしゆぶやしも
なるなれなり一取つくりのあまけとうりけるを

詩賦ぶんしやうのいろ見ぐもつくろふほとのちから
なくまつりなあらはすまねぐのふらかしらとおぼ
しきをまつるかくとんとそ代耕(ふかう)の祿をおかし
多例しいひかしの人あもおほうきとふるはぬまま
見えはりぬたぐこしひくくハむかしの人も腹のも
のてましあしハひしやうをまとう一大事とそ皆
よくぎんミしまへとも志やしやの多為ぐらとのとハ
あまきしまいぞなしとのまあらぐ○こしらへて
見えたりがしてぶしくとをあけとそかろく

しくぎゆくんのあらかくをゆるしまひ國家治具
の四十八さかのまつまを作へおりまこと打りくらつきのあい
ぶりハあけまつかきみ川かうし三つとぐら蒙て
此世となぐれまたらのとし月ハひとつ影ハかくら胴(どう)
まつき腕(うで)のなまかくもむそ小ぶんの金馬代ハ少なる
ぎへらり上り太刀とおぼしき所志しきまぐの志りくぶん
とおりまそ志んぶんしまらぬの子川まことに入用なき
とのハぶゆしやのやくめまし 閣(かく)上にあけおりしと
ましいまハむかしの六れとのかなり多作とも

いぶんなるなれも法ゆふ老さなれも見ハすこしきこゑ
ぞや

風俗醉茶夜談前編巻之七終

風俗醉茶夜談前編巻之八

東都　多羅福山人　戯撰

支躰門上第八

抱朴子に通天犀ハ獨角のけとのみてその角にいとの
ときしろきまぢこそあんなるしその真贋をうろむ
ふによるのとて角のよしにとりてみハとりにあた
えんくらハしゆんとう打うしみてとりおとろきとび
てそのよるのとくらハさらにしうハまとの通天犀
とおとふ思しと異物志に通天犀ハ角中に

光輝ありて志ろきことなり綫のことくなるかことゝなり
ことゝなりけるは志ほしこそげとくの駭雞犀なるべ
しと晋書温嶠が傳に蘇峻からんに嶠ゆゑて石
ひより武昌にいたらんとして牛渚磯をしたきけるに
その水のふかきとかるへがたしび世人つゝいふめるは
磯こそ水中くらねぶつのひそかなるところなり嶠
きてやうて犀角をてりやしてうかゞひしほとに
志ひくゝありて水族ひしがりなつまりて火をおほふ
なりが皆奇形異状の人あくむまくるほのうくあるき

ごろもなんどきけるともかくらもありしとそその東
嶠いふくゆゑくなるになるものやうん人のきてける
とゆゑしそうが嶠をせゑくいんなるにこもし君とは
幽冥そのこゝろこそ志とれまるに海何のこゝろで
かく相てしさるやとしいひけるは嶠が志ろすま
こもしとあくしとをほへて申めさゝんなるが鎮所に
いたりて志ゆんげつなしざるにやまひしくむれし
くなりあるとし蘇峻に醉ふくこもと法ざるに
かの通天犀こそまことに志んどくほの奇茅あく

さいめねのきこうとしてへる功あることのなるなり　温嶠が
よくぬつぎんのこうろをわたりしやかくきちら
あるそしふとしやくさねことやさるの忍さなりしかく
あるしとも此とのゆく水ぞくのえんぬるのさそ
こそかしきのめやくなくなれとも角ゆの相ゆる
べきのこちことそれは　ひとり水ぞくのこしかきしめや
あるしえんまへ月ゆるのは却らんごのぞんぞんのこち
えんるのは経史子集四部の書風俗のうぶきさしぐん
こうのはひりし　太夫の二三ぐんのそよかしめ

二十

王隠交廣記に　呉の時に廣州をわきて南陽の膝脩し
いへる人にとはせて此州の刺史あしきのけるに或る
人脩につけていふある此州よりいざせる蝦そのひ
けのなぐれるのあるをいふ一丈あんなれと脩きして
こもしとゆこと　なるさぐしかのうにその人をとき
らに東海にいたりて蝦のひぢのなるを四丈四尺
なるを得て封して脩にわたりしかは脩ちじ
めてそのいつたりなれにわたりもふくやうとそ
第に解ふて　こもしと読むとうにざしぬつのこうとき

その巨細(きよさい)をやしこしつくせる事ことなるへからざるを
や蚊蚖(ぜんぐ)のしきしきなるぶも志をくびこしこそ其
もらぬ鯨鯢(げいげい)のたひなんぬる隻鬚(やきしゆ)もの事なるこそ
なるしかしまた国のさんぬつ又ゆふなんぶのいもまり
まんのさんぬるんどこの他にゆうあるへのかくりて
いものなるぶさハ三四丈さんぬのなるさハ十丈餘なるを
いくせうとさてこそ風土のをしてそのかく長
ぜるまことなるゝの今東都えんくんの風俗にハ又
こまとりなるのあるをやあまたへ国とうだい

こそのどしせねそてとさけのまれたる事なし
なり
蜀志周群ゟ傳に先主むかし刘璋(りしやう)ゟ座にくらゐし
ゟ府張裕(ちよう)といふとの璋ゟ府の従事となりけるに此人
ひまねはりきむまきなるしかハ先主これをあぶけ
ことくのあらはむかしまゟ涿縣にまとゝかし時毛(まう)とゝね
となるゝ人のねはくしくし東西南北皆諸毛なりけ
きハ涿縣令(ちくけんれい)いひとてけるにハあるゆかしや諸毛こそ
涿(ちく)をめくりて居たりとぞ裕まてこころよかる也まゝに

ちくさんをあつかひけるに報じていふあゝひかしや上党
縣潞長とまうすめづらしき人ありしに涿令となりつゐてうらやく
ひとをもていふにはくはしかれなどらの志に
かんかゞめるに路長しきりとなりしは涿令といふ
ことにしるもの涿令とかきぬるは又潞長にいふ
ものをとりしまらんとつとめけるにはしくちようして潞涿
君といふなるぞかくしけれど先生むかしつきていひげ
なきかし海路八裕ありとて先生に報じぬるを
うばひける先生裕かいの礼なれとさしらずなく
こゝろみで蒜箕に酔ゝみてこゝと法なるに蜀志に
乃せうらとのかゝりこそまことにおかしきことなるを
五雑俎に三国風俗のうちに蜀の俗毛つけし涿といふ
ものなりて是裕はひげなきを人なりゆへ諸毛涿とも
なもけしあざけりしに先生はひげなれどもかはれ
こゝろと潞涿君とはおもはれけることのあまりのことに
小補韵會に潞と露とつゞきあしかりしといふ
字義なれは潞涿こそ蜀の涿とあつかはしていやし
おもひしいふるさまなどいひしかはゞし

呉普本草に牛黄ハ牛の神に出入するものあるを
なるゝは此をのあるゝ事をとつて牛をうかひ
ひとく光輝の角中にそしもるあるんに此牛死し
ぬるしハそのかね膽中に入て鷄子黄のごとく雨とかに
くるゝとなるを牛黄といふめるし神農本草に
牛黄ハてんかんをやしきやをのぞ鬼をしらへる
功あるし陶弘景とのゝ也此に牛黄ハ神牛のよくな
まほえぬるものあるして なるゝは此をのあるゝ事その
角中にそしもるゝ ひとりあるをうらぬく

盆中に水をうとく角をてしも付ハ此牛なるゝは黄
なる角をしれて水中に おとせるなり志るゝしもいまの
人角いてね膽腑中につねくもしをとめて盆水に
てしもる事なんとなりしなるやく志四のあるの
ともとのもしにまれたるゝなりしとて本草圖
経に於ける牛黄をともるその牛のこれくいざさんと
もるをうかびせるゝ志れを志るぬるしハそく時
に盆水のうちに於とせるなり志るをとりくらげば
しにもるる百日鷄子黄のごとくあしくかろくあはひ

あるものをぜつぴんとなるなり 牛黄は四志のこと
なるゆゑあり その黄をとりけるに付志りせまりてまかしむる
ものを生黄と名づけ志りして角中にはゆく
ともしるものを角中黄と名づけ心の臓をまぼるゆゑ
ふとものを心黄と名づけ肝膽のうちをはくまもく
しけるものを肝黄と名づけ多しどし皆同切のよふ
ときやく志ゆるりしてねてい志りせまりしく
志ぜんにはゆるものを志やしいんとなるりとて蒼茫に
醉ふくしを読むるに本草志まるものにしくにかる

らしき神牛ありしく乃ち此黄ありしいひなれは世に
神につくしき牛なれはやいかてかけるのとしめぬる
ゆゑりこそ阿しざしめ孟子盡心下篇にをしく書
を志んやば書なれは志るをしは知ほもありしはなふ
とき大賢のおしへなれ蒼が志ぞの鹿一秩父山がた
より申きふ猪人のかくりきかせしるに炮とて鹿ほし
おかしざしなるいをひしきこかしぬにそんぬと知ほ
しきとしちりはまんちしとちの大しきなる多海
こそあんなるがそのかたき事石をひとしくおもの

いろこそ藍(あい)のごとくいまもよげにうろハしくなめらか
なりとぞいふより鹿ハくさくふかの田へ百草の家
化しくしけれ田と生しあるもしけれの小かくなん
どもそけつりこれしくなんさんもやめのこやう
やくなりしあど鹿ごとに皆しけ田あるれし
もあらさりとし田く草くふかの切ほき
鹿れしくなしけ此る田ていせくとそしの云
とてえるに本草にのせらう牛黄しなしけ牛の志よ
くまけにようく切のもしさしないに生しぬる

くまねをあり川しめ神につくしき牛あるくしけた
まありしハ志んじかくれ又馬なんどの死しく
かくしにまてあるがたしされうかくへハあもしえ志へなる
らまし此る田のいてぬるなんと馬も百草くへことの
なしハ草精のごとなるにぎやくしていしくしけ
生しけるを鹿の玉し円しかしめやさそこそ
風俗のことはざに何をくまどかになめくなるとの名
つけく野露馬の名子といふめれ此る田ふくく
いいたしめしるなれ

左傳に僖公二十三年晉の公子重耳（ちようじ）亡人（ばうじん）となりて
まつこくをめぐりていしばしばしば曹の國にいたり
ていしばしば曹の共公（きようこう）にあひたてまつりしに共公
ゆるさずゆるさずいはれとえんとゆるしたまふに
重耳をしらずゆゑにやしらんものあらんなれ
をうかがいやあらんこれをみんとて蒼葉は
解かくこれを說とるに駢齊（べんさい）はかくほのぼのとあけ
どしらずいてのごとくいちやまぬまなりけるといふあれ
かつてかくるるがかくうまれつきあしき人もかくれ

けるつるあぐ此人こそさきのちからあるものなりとや
武藏の國高麗郡（こまこほり）窊谷村（ひくやむら）といふところにまします
老農のかたりけるむかし元錄のころ加賀の國
なるぎはのほとりよりまかりたいぐまの村にて
とりあげいりしむかしまことにそのかたちを鉄（てつ）
和尚とぞいしけるぬしはいづれぞ世にまれなるもの
多いなれまく牛のいりうゑあかふとつのようなる
そとし馬のくるふるに人のくるとあしとうるげ
ぬるるんと石のかたちとそあそふようにたやまに却ゆく

てられハ村民(えんえん)のともかくも此すゐ之しらあるなとの
ゐなるもの人まあつまりてんぐするよし地をはなれと
わしつきし此りもの幹骨(えろ)をとりかへ女にあたえ
是そのくぐまじろごとくに西まきのは〇をしら
まねするものハあやしけれどもやてんぐるんとの
きりくぐ〇ハかくいうまねするのみやし左傳に
ゐのうへんの事すりしハ駢脅の人のちしあるを
志つもとしてかくうきもゐるハのつしうるに地をとりき
ゐ風俗の言に僧の事のきてとらいしぞといふ

なさきてそこ此りしそがかいゝらる〇のとゐかくかる
あるがごとくなるハ言しでまちもの鉄ハしまかるの
南史方術傳に宋の薛伯宗(ろくそう)といふ人ハよくおあつかりて
よく癰疽(ようそ)を志めとくまうけやしまに公孫泰(ぶ)といふ人
ありし背に疽のをつしてられハ伯宗ともひひく
てられとうつさしめけるに伯宗そらのいきをとかく
あるを封しうつしく齋前(さいぜ)やるきの木のうへ
かせしかハその明日泰が癰のきえてやるれのゐて
そそひとへりの瘤(こぶ)のたいさうぶしのごとくなると

生しゐるゝその瘤やうゐくに長さるゝ二十餘日に
して大ひにうゝゐるもして黄赤の志る一斗あまり
をいくしはしはその木をさしはしかとめる瘻損して
りもしうとぞ蒼茫に解ふくこれを読むるに此
事はふぢやつといふくはるのもしれども世俗ゆゑ
なひのゝのよくことくしくいふにはよいざしめ今
の風俗ゆゑもとの志るゐをとるゐてんべのつゝれきゆゑ
なひはるに疢癬ゆゑ人のたゝんもりて忍の木にう
つしぬもはゆゑ木をかたひしぞして

人の疢癬のいふぬるをあもしゐるへよくもうけもるその
ゆゑかくのごとき事ゆゑもさしはしとはしぢやつといひ
なはざねぢよしまりてさしとくとうつゝ
ごやのよぎかりて志しゝうけもるゐんとさそ何
のぢやつといふゐしや

雑事秘辛に後漢の桓帝建和元年四月丁亥保林の
呉姁丙戌のこゝとのことして中常侍にくくして
いふめるとゝの大將軍乘氏忠侯商がのこゝろところ
のむとめ貞静の徳あるとし禁液にきこへ侍もは

なんぢら姉と少くもに高かことはいまうてつまひらかに
幽隠(ゆふかん)をつくしひべしと姉こゝをみことのり
のむ○を奉して女瑩(ちよゑい)がことはいくり幽隠をさぐ
ゐぐやしけはむしてあるに令していふある私の小結束(きやうけつそく)
をゆるめよと女瑩ゆとてまあられいろたひしてま
とて抵攔(ていらん)やしけらし姉又瑩につけて今官家礼(くんかれ)を
ゆしくしてなんぢがいゑの朽落(きうらく)をかりおいんとの物ゆを
なりなんち此私のりつくとゆるあるは他日なるしれ
ものに報(ほう)ずるに鞠衣獻翟(きくわよくてき)のくるほとてまゐしいふ

ゐるは瑩なんざまぎやくくらくし目ととぢゆとて
とてんじうらはむしゆどにやがて姉これがため
にまづりつくをゆるあく日のひかりにつゐくうか
かしはしは芳氣これおそふく肌理(きりじ)臓潔(ぞうけつ)なてゐるに
ものとぐゆんゐるくうなあくうにまへ規(き)にまるへ
方にしくきづけるあぶくこも面きさあるがごとくなり
胷乳(きやうにう)はゆんのごとくにうるぞ
すがかりのくるものいふべけれかの私所(しそよ)のうごとら
ゆこれりまさゐはにんとりの肉(にく)ともしりさいくなり

両股をのへしめくこれをうかがひ見るに陰溝のい
ろハあひくつまり丹のことくにて火齊なかんとし
てぞうこれこそ礼ものとしてつくしきびしき處女に
うたがひなかくしめんとぞ蘇秦に辟かくこれを詰ぞう
に秘章の私乃字にて手もなく如陰のるをさまる
なりまが国のハくぞんにも男女の陰をかくしことれ
もしハその名もことなれるに漢のころにハ男根女陰をの
名相なりふく同ひくるにや荊燕外傳に荊燕が父
の名ハ馮萬金とこそ人なりが江都王の孫ひとの姑蘇

公主中尉の趙曼がことにくぐり嫁しひしに曼つゐ
づゐ萬金を幸しく祿やのうちもしちくよひしかバ
萬金ひそかに趙公主とつくぜしよう主をしひるに
曼うかりくもやく私病ありてをしるにちかづくる
なかりしゆへ趙主ゆも曼とかくしハるにひそしくもう
ふるゆへ切をもしく江都の王宮にかくも居て孿産に
ちうのをしるをうしてこれと萬金に切りもつくるが
その子長をハ宣主といひ次をハ合徳といふ宣主む
まもしくもつめいにくよく棄術を切れひ擧止へんぜん

そもしれハ时の人に嫁を飛燕しハぐちれけなくとて
えりよ愛ぅ世まじハ男根のやましめく物病しきりしハ
それがらこゝろれども それの同しきとアるぞん後世
の史のやまと揺ひるよ唱の正徳よんちゃ刘瑾ふ之ちや
うり地ろく天下の心とそうたしおし一人でのまう
まとゆほりえしハ时の人ゑしと嘲弄て老爺ハもとろう
松なれ人るれハそのゐてこしそそ高し人地名
やけるしゆんといふあふかんさへとききもと閹割
火者るもしハ公私の松の字をかくとそ怪その志るよ

松のうれるとあげもるかでとくらう男女の陰ハちん
この樞の牝牡あるがごとくいしとつれぞらハこれの
そとしれこと松ハそのなつく同しくハ男としそて
なとみとしいふよ何それしかもこもハるしべ松と之ハ
陰のそつめしにあつて男陰女陰と陰の字相つたド
て同ゆう義のごとくみそて史記よ宮刑のる解して
男ハ勢とされとるハ幽閉やうし此なことそとしてある
よ男ふかぎりて勢とうしそるふ是ぞて幽といふある
ねもし文ひうしくうその女ぞそかくとるりしるるとあも

又ハ俗話小説なんとよ男語のるゝハ亀ひといひ鷄
巴といひ和尚といひ本銭といひ或ひハ廃骨朶児なん
どのこゝろいひ女語の事をハ毬といひ紅といひ頭
茶といひ宝田といふのゝ皆その名をもとれりけれ
いはんや抑ゝ事なるの語なんと見ゆるもその
名のことなるにぞかゝハことゝなりてゝ語なるめしとく
ゝてゝ国なれハ破瓜的年紀といひ或ひハ茶也不曾見
面子といふこゝろ思ひきよくにけいはしせしかゝそれ
もしろけれお男の語なんとも老子経に鮟とかきしる

そのことに牝牡のあるゝ志しけしく鮟作さるハせね
乃いくりといふゆゑさてこそ鮟ハ男根の抑ゝれ名なれ
風俗の小児の抑ゝなのゝ志しけ○ども元年いけれバ
勃爾としていけれるに親駄子のあいのあるれる心に
ハまろこバしくて此子ものらにハ心どうこゝめし
それにおもとてこれぬとのゝ姉にせ多くなんと為の
としがるもこれ又天地三ぞんの抑ゝしるさゝぬに
蜀志に先主うまれくいさしあるこゝろ目とそれ
耳をかへりこむへりとぞ蒋菜に解ゝて元を読まるに

風俗のとりゆきに耳のたひなる人さして福なあるう
まれといふなるあれ人をへ三國ていそくの時勢ひ
なりて益州一方にせねと称し已ふ先主なれハ
かく人にことなるさしこそあるつゝめの耳のたひ
なるハ天子となるしるしにまきれなきや
いひこれとのるれども蜀ハととりて漢の中山靖王勝
のせしあしにくさてこそ天子となるとしへき門地な
ましハ昭烈のそしねにつゝもしふハ耳にあひる事にハ
めらざりける人にことなるに大ひなるてねさしあれハなるべ

貴人となるしるなるべ戸塚の大きん多田のこじ
きバしまでといてだしの大あるゆの一寸バふしもやう
て貴人となるへきや
晋書藝術傳に歴陽の陳訓といふ人秘学とこのこ
うしるひとよくせし時丞相王導つのにやまひねは
きとうまへて訓をめしてうしなハしめけるハその
時訓がいふめれ公ハうまきこと耳大ひにかたのうへ
まで多れ已へハなるべいのちなるがくしくぐらね
大ひにそしていうしたりんとぞ萌芽に酔ふてこれを

談ぜるに江左のまれじとにハ王導庾亮のこゝるれば
王公の台輔にのぼるハ志んぬけのいたれところ
にて耳のかたにあらしかるにあづかしさしめ風俗の
ともがしかしその耳の大しなる人あるとも驚才な
らハ台輔の地ときてハさておきぬるべしとしかま
いとつのかつき志んぶねとも恐けぬしられちく
志ゝのいぬさへもその耳なれぬるハ耳なれぬるとこく
ゐてことにハなしざるとあるへ若も耳ハなれ
どもとしてられる肺病ありて涕のこれてひざに

いたれるさてこそよき事のあるしめやしかしへハいま
まむかしにかくしぬじんがふこそ貴人になられし
て饑人となるにちかしかしハきのじのあやまりと
地とられけるに
北齊書李謐が傳に或る人謐とほめていふある君こそ
陰源にあるべしぶんぶあつあり君子なりと謐さして云に
こゝへて陰源といふことのハ無とへハ耳のなるなるとハ地のも
ひとりしかしれども人志しざるがこくかくその徳とこ
なるといへともそのほとこされたる人ハいまとかけしく

しかるゆへにいまもかはらずとこころのまゝにあんぢ
皆これをしらしれは陰徳とはいへれさしあしや
と義事に酔ふくまゝと読まりに謚が陰徳と名と
ふる老荘のけやけきことのかぎ道徳経天地不仁の章に
天地は不仁だんぶつといふ芻狗しなし聖人は不仁
ひやくせいを以て芻狗しなすとぞ荘子齊物論
にも大仁は不仁といふある皆無為自化のかしへなり
かんやしざしんのめぐみぶんぬつと生しぬきとも
つねにこれをかんとせば聖人百世の師となるべし民を

かきめらへとも又つねにこれをこしとしこれはこれは云
いんのふくなきとも聖人のこゝろにちかきいへしき
かしへなきひかし陶唐氏の天下をかきめらふ時
しに民の壌を撃ことそうたふ云の義に帝の
ちからなんぞこれをあるんといふあれかんらけておん
とかとは無民あるこそ陰徳のいうなるにあれ元亀
もとんの世の風俗のいつくりかはきかんとそ
人に徳ほどこそうは陰徳あらはしして蔭徳なるかや
このゆへにほとこそもしんは蔭てござんはといふ

ゑとしたるゝ人ハ得たらがいしてさそこそまゐ
ゐるハそこゐぬとそ
左傳に宣公二年鄭の公子歸生楚の命をうけて宋
をうちそるに宋の華元樂呂ともとゝ言ねて大棘
といふ地にゐかいしに宋のいくさやぶれて華
元ハとしへらも樂呂ハ忘らしきて死しそうける宋人
兵車百乘文馬百駟とて華元を鄭にあるひ人
をうにそのうち宋に城まづけるのあつけるか華元
ぞぐ〳〵ことまくつゝあて言人の場めるわからきの

皆人のうたふく睅そうその目皤たるそのたら甲をさ
てかんもう于思于思甲をさてしかんをきたりしとそ
杜征南とのし註に于思ハひげ抄ほきのかたらなりし
義事に所ふくこれを読むるに抄まそ人のひげ抄と
がねにあるを鬚といひたるの上にあるを髭といひ
ほうにあるを髯といひ髯のなりもとのを鬣といふ
て皆その名こそ正かもしたるか左傳にいふあるに于思なん
どハひげのそうあらかや三國志に蜀の関羽とのひげ
抄ほうれを美髯公といひ北史に齊の許惇どの

いぶ多もしく抑ひよいたれハ長鬣公といふあるとも
よりひけとのゆゑハかくの風俗なりしともかくうるハ
しくなりれひげハ又うしあもめつくうなるあぞ
ゆるきゆゑあるかくしたりしうりうりうり風とそしむ
かしハひけあり風俗なり実盛とのがとしとそしたるが
そゆゑくうちしたるせしもしうさそこそ名くうかきひけ
なりかいまあくハ名あるひけとそとそそやせうハあもえ
ゑへかんぷうそん兵衛がをやぶんにひげのいきしと和田
が三郎こそやしのあるひなれ

前漢書佞幸傳に文皇帝鄧通を尊幸しもふく
賞賜鉅萬ハん上大夫にいたんぬるが或る時帝相者に
抑ほせて通がよくいふと相せしめもひけもハ相者の
いふあり此人ハん上大夫のそふきにいふるもの
のちなるにまづしく餓死もへしのの縦理の
口にいたりあるきハめしく餓死の相をしいひしかハ文皇
のゆほせにより通をとゆきんとのハ口もなりとて蜀
乃嚴道銅山あるいるとそぜに鑄くひてこつくしと同
しめもふほどに此時鄧氏銭といふく抑のぜに

天下にあまねく及ぼすの前にてあらはしけるにや
かゝる帝の癰やまひに付てあしかりけるに通これを帝
の為に其の膿をすひしかは帝問ていはく天下たれか
もつとも我を愛するものなるとのたまひけれは
通こたへて　皇太子に若くはなしと申あけれ
は太子の親しくて　帝の御まへにまゐりて申けれは
帝かはらに其の癰を錯しめたまひけれとも太子も
こゝろよからすいろに出しけれはかの通をふかく
通か帝のためにつねに其の膿をすひけるをきゝて
恥しかして太子はいたくはぢらひしかとも其ゆゑは通
が佞幸とをにくみてありしに媚をもてあるをしりて
いふにやあらん　太子の位につき給ひてのち通がい
ゑをとりあげしてなんぞにいたしけれは通もやがて
うれへ人なきものにしなかりけるとぞつゐ
にまづしく死しけるとぞ　前漢書に称してこれ
を諺にいはく厳道銅山のもとをいしは通をも
てもかくまづしく餓死せる事をいへり
いかなる縦理の相と牽強附會し　佞幸は相者の

こゝもまことしやかにおもはれしとも蒙り愚言も
てゐんもは通が餓死ハ倚幸のまぎて媚のまんなをかか
やし由へぞかし父子のあいたにて齬ふにまぎかり
玉ふ癰のうゝ志るぐらも媚りんぢりの甚しけもハ
汚穢のかくむへきるのまともてまふるなんと小人の
こゝろに忠義とかとふくつくしくらんなもとも
てんりんの志しき太子の御身にて通がつく御身
志んやうにおよびおいぬといふときハ皇太子へもいし
まんきかかしくらといふなしやきんきかかとし由へに

どうしゆきもしゆきしゆへに人家にき
志ゆくし人家にきしゆくせし由へに抑かり御づし
く餓死してぐらこそくらの縦理のゆへなくれして
くらとて癰をまへるか由へなしの志りくとつのいるべ
きくらへいるまじき癰のうゝをいまとうこそ天理に
あぐふるくらるれハ縦理ハいまとうくらよりも
そのふしやく甚しきなや通が餓死せるハこともう
なもいま俳優のともがしの駿子の人相よそハふ
とてまとてそれの志へふろの縦理つくまてくらに

いまたらそのみをもつかはしといふめるに通かれの志たの
まぐらそ夏ぐばくのらんしやうなれ又俳優のこの
ハ侏儒といふく礼記にみえたるとあれ見えたる国
俳優のらんしやうハ古語拾遺に詞まてしれ如何
がしあまのいてしやうてむとしやうへハ天細目命
まされのかづらをかけたるもれしいかげとなまさに
していくとのまへにたくさまざまとして相とも
ようしひまふたりハさてこそ風俗の大かぐらまいし
めなじ御りゝ

温公通鑑魏邵陵厲公紀の註に相書にたるより以上を
天中となしくらびるより以上を人中となるを裴
松之どのくやつとしてくんのたれにハ山のかたちあり
て天中にあるつるにぞ山ちとしたるを天象にそぐし
あれバこれと天中の山と名つけたりとそ義家に
醉ふくこれと詩をもつにめんじのまづかなんぬるあいだ
とて三才をまかり名つけあるにたれのさいたるに
天部につきたれハ天中の山といふて義理よけれ
としたるくらびるにつきやとかゝるにつきたるとの

ありハ文なりしハその名なくて人中の山地中の山と
いへるハきんきやうの仙法文なりつきどころに
よりてちがふはし同しくれかくなきんきやうの
かくちがひあるハきるとそめいかくにかたくへりんかくの
ごとくにてうたがはしきつきやしまさがらしる相学四
支百骸と名づくるもの皆あらはしめ福福の光ど
ころさみける人まじまりにあらんなをちらしたる
されバまことにわしてはへなとや國僑にひらし史伯
が鄭の桓公にこたへて周室のまひをしやうしたる

してのちおのおの王に角犀豐盈とみてそ頑童窮固と
ちかびろし韋昭が註に角犀しハかんざしの伏
犀あるとしさいばきのひたいおうちにあらり豐盈
とハ輔頬豐滿かしてあきとのいちたくて大なる
これもかくらるるかくうかれつまりみ人
これ皆かんがいのきしなりとてまなびの前にあらハ
あしき骨はいふまハあらはし頑ぞしせんまとの見るに
おろかなる人のしかあらしかのとかれつまり小角
犀のいとおにしあつ豐盈のあきらにしあんなかさその

さるのつれとなんめいの人の跟随人なりともかほと
の騃子あるハかんさしのきんつるし作りをちぐさ
物事のうかれたんどハ望門のあいづちかけりとす
こハ抔ともし任しん朱文公通鑑綱目に秦主姚
興が東平公紹につげて妍皮ハ癡骨とつかべし
といふあり此まさるもむづかしき世のなき男ハ皆かい
なんかしてあしき男ハ皆ぐちなる小人とといふべき
されバしてゐる人もなき男の気をそしきの人もかハり
のうろふしきるみ地のもとめて作りくいちこの心のきち

にけ男とあやかりて此としかの人といひて騃
子の天下一なれバ角豊のさしあらハれ男ぶりとも
かんがせのびあくとこのなくなりてさぞめでたし
と神もいつげて雅やかなる中之のかんにまた多く
ゐなかものがちからみにもまなぶってはたして
一句をつけるかく角やあん豊やむかしのつら
なる騃子のいとつハとも男めかしきは作りもて
られむかし男のふるまいの姿そのもとら伊勢物語
のかげがふしみて魘されける

北斎書案遊道の傳に遊道ハことをくさうかんばくの
性とく八獮猴に似たれどもそのかほばせしハさぶらひ
つらにあつしさらさのかやも文宣の天保元年
清く大府卿となり兗州と称せしに士民も
遊道がかんげんをとりのまねをそしてかうしいまる
がらやしろかれてをまたともって忠清君とあ。
めんぞうしもど蕭菜に群かりそろえと渓とかる清き
つね草にちかづくるくらべたりゆくきんつきあらしめ
こゝろハるきかしこきらかしこ夫にうつさばうつる

さらぬやしハゆかしきをぐらきのかんてのあしゆき
ある国の記録に豊臣公の事を記して云ふむかし
といふあらかくさあくき猿かしも天下と御し
しふて太閤の尊ふりき人のかたちより手桐のび
あくハ才の足りなき人のありて又こうりし柴田
勝家の小国にくらべられてかぎりもなくうちうし
その才の太閤に及ばざりしハいふにしもあらずして
うせたもしかさればそのころに藤吉さうづくかあやまくに
猿とかいふたりしいふ符事也のかたちの人に

ハそしるもやんえし。ことはいとしとくとくるるもは
ゆしよりるとよくんゆへきはなるもやんゆしめ
といらぶごよんのくじらいげのじんさしいきなら
ゆきゆるんどひごこのあくゆとぞんえけり恐
史記呂不韋が傳に莊襄王の母夏太后をおいんらんに
して相国文信侯呂不韋と三つけしゆし
りるが莊襄のくしおまつきおふより不韋ゆぎいひ乃
ゆか力にゆよひるんるの ゆきしく大陰の人とも
ゆへて嫪毒といふとの得くぐるほどにやうて毒とし

て舍人のくんとなりしめく倡樂のあいふきやう折
りし毒が陰をて桐輪をつくぬきいそゆりしめく
太后としてことをきかしめらるに太后をしてし
その大陰に啗ことしふくこうひきかに毒とおん
せんるのをこのことしふゆをいつくく腐刑せしも
ゆりしよびるし侍りて毒を命して今んぞや
とるし大内にいきしふくちよくあいせしも
事し世にゆぐひるかりしとそ萬事に解ふて
ことを誤ぎるるゆ ゆよそ男女の情ハてんをねのやむ

こゝろぶかるゝといへともをとるのとし考ふるま
でかくわんらんなるハこれ又いとしのやまひなりけれ
前漢書に呂太后の辟陽侯審食其を幸し唐書
に則天后の僧の懐義を幸し此ならさぬ
ことしもそのとしごろハふんぎいざかりのわんきよ
さゝめなるがちらしかんなりてしたかりにさしぬ
ちふ事し中冓のいなるもしハ志しぬかほしてあわく
とまくんなりしどちよしあいのふかれなりあハ
はゝに陰るのが改るまにあづかり世のなしひぞなげ。

たしまゝ国称徳天皇天平神護二年弓削道鏡に
法王のくらゐをとらはるゝかの道鏡法師をも
とに男めしがれなるゝあやかりけるとも
なるハ世の人のおこしをしてやきとらしく
けるどもいとをんもおとらしりしかくてきせん
らしにやくの為ぞてなくいろのしらこそあれ
ゑへくなるとのしがんをつまもわんきよしあ
ましゝ祈ことなしぬ山をことてくとる事し
のかぎりなかりけれハ或ハ俗の山ぎゐかくなる男

のたまりていまゝりハ人のいのちとるものゝあて
りれハとて腺(うで)首うしなふたり法師のてんハくど
ようじるし人やとゝふくこゝろとおくふくこゝろ
れのあるうのをうもしハ志のじてかの国(おや)のうちてし
うかじひてんれハあれいさえしやそのてんがうどの
もさてそそそやうちかたかたうあるまゝむなし
くなりてふといふのうちいとゆかし

北史藝術傳に元魏の武成皇帝の時徐之才(さしさい)といふ
人けぬきゆうとゝ世に名をとゝしにせしが

りし武成帝酒色にはまりもしふくこゝろ悦忽(きやうこつ)とし
てつるなりしハそのやまひのはたれかおとに宮中に
五志きのそのあるとみんもふにそのものやうなく帝に
ちかづくとおぼしけれハそちまちにあんし
てひとうのうふくしれをしなりしなり地をとさるに
るの數丈(むくだけ)にくく亭(てい)にしてあらてけるに食頃(しきくきやう)あしけれ
まさへんしてくりんぜねんけさのしなりしうりし之才
けつまひを按していふあるこゝろしたる色慾ゆうくだ
きよせう人あしこゝろうるしハ幻(まぼろし)のことくにみとし

なのはなかりとのなりとぞ萩葉に醉ふこれ
を読ばうに此せりあやしきはほかなりかつ国のことは
ざれば影のやうしいふるはひかしよりいひつたへ
ゆうとのかたりあれ類説に離魂記とのせて衡陽の
張鑑かむすめ倩娘にまれてひきねたぶひるかり
しに鑑か外甥王宙といふものあんなりかつ見くし
てうるはしきうまれるかれは鑑又ことにたはふ
ていふあつかむすめこそるんちに妻あはしてよ
うしみしいひとてぶれ折から鑑かいふに賓僚のあり

びありてよれむこのありしほとに鑑又むすめを
はむこに妻あはせんとをし時倩娘きてそのころ
嫁はるのゆゑのしまれ王宙も又鑑がかりく
おのもに嫁やしめんといふ又他のむこととあるを
ふづくしうしみて上國に客遊しんに祢かふふに
のまて由くる數里るかるに西まとおはしきころ
かい岸上に人のきそもちありけれは宙かこれ何
とのやうんといぶしくこいでみてぶるにおのかかほく
忘ふところの倩娘るかれは宙もおもしい人はなる

のうもしさまこうと倍して以をもなすべく
蜀中にくしまうか居るものいくとしへて二子をもん
しやうしてがう時倩娘志まうに姉ゆうさもの父母をゆふ
ていふあるこもしひしきまに相をひくのかれしさま
大義をもてきしがことにとしまるれ今さら
父母のあるかこそまづかはしかれとせんかさるこゝに
むせびかくりてかれハ宙はすまいていそぎ分れと
命しく倩娘とゆくとにふるさとにくるあるかほとなく
州郭にいくらしおかし宙まづはひとしく鑑か

ことに報せしめていふあるさまに倩娘恩義やむこと
を得さるのよしこもしまうしまうか父母のあるかの
まばかえしきせんかさるさ今又ふるさとにかんりき
ゆきしと鑑きてあれそろそろまうなこもしまあ
やうて国のうちにしゆれこあいでさうるとしへ
そろにいうてかゆんぢかことにしらめやとかひ
かもしハ宙又こうえていふあるに現にいよゆるのにうに
ともゆいきしりとで鑑ゆとうき人としてゆゆく
えんせしむもハ倩娘こそ伝せんとしてふるの

新話にも景園記を引て清河の張鑑がしたゝめ倩
女王宙と志るしふて蜀にさんぬるし離竟記と
同しけれ以てとりしのかゝとしてしかるに如魏の
武成皇帝衡陽の王宙かともかくは影のやまひにせん
おやゝ母にしたゝの惑をとらしかく
あやしきやつといひいでしあることさらるれいし
らんの人なりしめて又仇俗の人にもきにぬしかそく
のともかくはかるに遺精してをとるをやしは
なるをとゆゑをあるとあるとあるへ新のやまひにて
あらてさそこそ申ゆんのやまひにて

風俗醉茶夜談前編巻之八終

風俗醉茶夜談前編巻之九

東都　多羅福山人　戯撰

支躰門下第九

晋書郭璞が傳に暨陽の民に任谷といふものあるし。
あるべきものいとあるに木のことゝ見えてやまひしに
こつぜんとしてゆめのはなろしのことゝ知はんと
羽衣きけるに人のきたるとみへしに此人谷といふ
て淫せしほどに却とうきさゝんとあらしとみえ
かたの人とそ見えんぶりけるに己もよう谷もうれ

い祈しきりに今さむしのうらとりなやしき祈す
ミのことくるうとのいそく祈しきる男のおんまさへ
いざまつきおんまやしのかしらを口にあてゝまふる
にまたいふく男のゆめのうらこそをとゝなとかしいはも
ふこうらしてやおのことゝるのかきりなくおぼへ
てゝりかそのやおそひとりおいんぬきは此むしおん
きやしをとるふく又今さむしのうらにいるゝ
しし一度此むしにまたいきる男はあきの見えへ一代
陰(かんわ)癘の人となりて人道おもふるこそなしざり

を奥州風俗のことゝさは此むしを名せけてまゝりと
とりふのもとめやしきとのかゝりるんともさどか
まのへんごくるきはかくねるんのとのもおぼかし
草木疏にのせたる含砂(ゴンシヤ)のむしも南越の淫女惑
乱の事とり生きといふゝやんたいのまゝことゝ
ともさそこそ志しふをとゝるのけしんかや
北魏書古弼(いつ)が傳に弼まかくして忠謹なり明元帝そ
の才の真めして用あるをあいしまふくその名
を筆と名まひしかそのうら筆の輔佐乃才

なるとて弼るといふ字義とすべし又あしきをあて弼
と名つけたるしし弼るれてそのいまきのとが
まゐるはけしのことを筆臣といへるなり大武帝が
いくいうまだよくしてことを尖臣奴と乃
たりたふもかんでのたんともなるゆゑ時の人おもはい
ざめも又弼かるの名づけて筆公ともいへりとそ蒙来
に解ふくことを張るかくのことをいふ
しへらうゆゑなはしるゆゑや詩三百篇に
のまもふ賦比興風雅頌の六義も皆りもとそこれを

興しはしをそりもに比しぬるなりは北魏の
朝の弼が臣をくふんてに比しぬる事古詩の六義
まるゝ久しを例しるれいまは俗の言あも器
財りてことに比しぬるはさいづらなりといひとん
だいづしといひ棄形もてりもに比しぬるは志ざる
といひさるゆゑにといふあるとれ又六義のいふらな
らめさくことゆゑ歌謡の言の筆なんとも皆賦
比興にしをとる事なりもぬるといふもくさの名
蓑荷といふもくさの名富貴自在徳あるゝ冥加あり

勢ゑへやとは 寒きとて 鬼しきを與し 蓑荷とて
冥加と與せるなり 是は 野にさく 鬼しなきいれよ
をしはとしかもちしぬまにとは 此身のうつもりいろ
とく 野花のちるやまれに 比まるなりてんく
てんとくなるは 何ことこの志をよめしろ 不動はれの
さきとは 其のこへいく に叙し さもう 賦なりの五十
はやまひとのあとのあとのあるひとは 五十とて
よろしと與しあれともあまへそのてわ 賦
なりけれは 半與半 賦とてんえんけれ

宋景濂穆陵遺骼後語に元の至正二十年乙巳甲申僧の
嗣古僧の妙高をしとんしてこととの宋の會稽諸陵
をこぼうんといひけれは 江南總摂楊璉真加といふとの
丞相桑哥と同しく 此のをとてやして 二僧の
こひにしたるひ 諸陵の宝器とあげもとり 宋のとるく
ふかどのゆいこけとりけるして 浮屠塔を抗の故宮
にこんとふし 理宗皇帝のいくしきをたちく飲器
をつくもうとを 箱にかに 解ふくこもこと 後にもうる
むりし十六いてもこのかしいかしかしく 中國

のうまへとなしぬりこゝろしも晋の懐閔二帝いとれ
るくして石勒がまにとらいくもいあときこゝろもきて
さけの志やくとりてもふるんとさしるれ中国のちゞよく
とゆとひけらしゝ宋の理宗のときハ朽骼にるゝもの
しのちまでも蒙古のいてきにかくこゝろしめしも
もふそくらとしきいたくるゝにいたんや飲器といふ
ハさけのむこつくにあらて虎子のるゝにて少ゆんきれ
うけくなりたふとき天子の御ぐしとけがらハしき
渡器にけくきうくのうけかるひるきかくのむかしし

とのかくりといまよむ義ゝ同めくも法ぜんとるんあも
よふもこゝろこそしぬきハ當時宋の舊臣ありく此
るのきしきしめハそのこゝろいかくなるへきや唯の太祖
洪武二年己酉正月戊午丞相李善長におほせて工部
主事谷秉毅北平大都督府守臣呉勉とゆくりにかの
飲器を胡僧の汝納鑑蔵深恵がことゝにことゝめてこれ
を應天府守臣夏思忠といふものに付しくそのとし
四月癸酉に南門高座寺の西北ゆどうけめさももひ
りりゝ明のん六月庚辰太祖ふづかし浙江の行省了

いうちふく宋のこそこれの圖を思いんましゐ
して蒙古のゆがきたる舊穴を封じてをとのごと
くにゆゑむまちふたるなんとこれ太祖徳義のいまもう
かく重厚なるまなるしハこそ濠州皇覚寺の僧徒
よりいそ天子となりしせもふかとのちの世の人は
君をもう隣の仁政ゆこるしもふ亀鑑となるへきいみ
じきことのかたるもむかしふつぱふの中国へいうたる
時ふやうしいひぶりこつといかくたふとしたるものも
これ皆祖師のゆゑをとそあをひものなるしたる事

ぞかし人ハ死してがいうあもふくゆゑしりて却ハすと
つくしむべき聖人の却しへなるにこれくして死せる
人のゆゑとりいぶしして志やまのぶりこつのと名づけ
て風俗にをそあをへるハ死人にちぐよくあらふいと
まるれしものひまに茲僧のともがしの志ましゐぬる
すにあまたへ猿のゆゑとしくふつこれの贋をの
つくりく中国へまたしあるし唐書傳矣ゆ傳に
ハえ行りて枯骨朽骼いじまるハとしくぶりの
會手とのなるとも唯の太祖のことはいうぞかへるハ

さてこそとびが為にとそうきこえし
魏志諸葛誕が傳に世話として引く黄初のむかし長沙王
呉芮がつかをほりてその塼をもてこしと臨湘に於
ひとつ孫堅が為の廟をたてしたりける長沙王
のましいしとうらいし人傳にそのやとていふもろが
こしありしいふくるんも なほさりなるあらつる
はぶれるにあづかりしその呉綱といふある
君のかしらこそなくも長沙王に似たりともこうしも
らくふかきこし為けとしるものゝこと 綱きこえぬ

瞿が人として いふあらこさしてかせんぞするとし 呉芮が
卒せらとしえをゆのあらけるよしあいてうます
ほとそ四百余ねんありて 綱は呉芮が十六代の孫んなり
とぞ翁きに酔ふべしこさしと語られる 晋書卞壼が
傳に孝武帝寧康ねんちうにぬすびとあつく壼が墓
をあばきてかばねの壼のびんびけ蒼白にしていある
とくあらしてあてきらて居らしゝその つめの
のひるがえのうしろをめぐらかがたみけちりき安帝
きこしめして ぜに十萬と為ありてその兆域と

ゆきめさせ玉ひしとぞ此ぶくとて入るに下壺(へんえ)を
蘇峻(そしゅん)がらんに死しけるすなれは成帝咸和祢んぢら
の人なしめその祢んだいをこうんがしあるに安帝の
時にさまざまてうる八十のんにゆきへちなり人は死
してはとにかくにくらぬうるのまぬうもがるも
ゆや左傳に臧文仲は死しあるともそのこくら
ぢとも称しけるに以前の世までも不朽(きう)の文字は
こぶんじつくりのくらくもとなりしれとも呉芮
下壺のごとくにあつくはしむかしし人は死

ても又そのかくらのかくくらぶうるんと云の不朽とも
なるとうかくらの不朽となるけるをなゆめつくる
なるとのうくりあぞ且の国とてもむかしはくらぶう
人もめんなるも享保元文のあいさと申はしけるに
奥州磐井(いそい)郡平泉(いらいづみ)佐藤秀衡(いてひら)のいうる堂としぬり
たりとく国主の申さゆくさせ玉ひし折かし銅棺(どうかん)
にこゆんとまたる秀衡の由いがぶとうかひ見けるに
いくいんなぐしくいんとり長してまし間し
なくとも申さゆ法しけるか魏志晋書にのせるる

兵衛下壺が事に似たりけり秀徹銅棺のかたはら
に又いとしの銅棺のありしかこれはいつこの三郎
をゆきゆんとて棺のよし此棺ひらきかゝぬにさし
なまた大ひなる枯髑髏のありけるのこゝあくそのかた
ちこれとうせてけれはその人のうれしつまにとう
そのほうむるのゆきめかたにまりてくゆるとくら
さるとの称るのもありつるや南史宗室傳にむかし
梁州にかつつのあるとこそ名を尖冢と名づけ
あるか風俗のつゝんでいふあり漢の博望侯張騫

がほかなりしとし此冢をはがれんとする人あるなる
時しにはは冢のうちあるに三きりに皷角のこゑとのさ
はかしく相ふ事はいまほひあるけれははがれんと
せしへも皆ゆきましくさうそれあるとぞ南齊の
時に唐侯蕭穎達が弟七子に蕭敬といふ人あり
しか梁州刺史となりてかの地にゆきしきりけ
ぬし此事まして今もしはきとゝしてとゝしなれ
ゆゑなりとて人にゆほせしその兆域あばかしあ
毎日ははれしへ冢中にあるけるこのとてはは

銀をてちりとぢゆんてをあり祢かくみの大ひさ尺に
ひしりかいて多りとしまてこそ多き家のぬけがら
なりとのをせしのぬけがらかきしるもあまれこそ
としぬ

北魏書王慧龍が傳に崔浩が云を引く王氏は世々
その志れ鼈鼻（ごろくれ）にそなんぬれは江東の人これを鼈王
といふそうが以て慧龍とあらんにあらんそれの
鼈（き）なるをもてぬこくれはまことに王家の児なりし
てそのむまれしとしてはしきに妻あいさけるほどなり

慧龍かくるの鼈（き）のやしなくたひになりこれは浩（こう）
よりたびいふぬるこれはこそ貴種（きしゅ）にまきれなりしぬ
とぞ蒔菓に酔ふくこれと説たるに唐書夷狄傳
に黠戛（やつかつし）斯国の人なりゆれくあけたらくかゝ
ねかくかとしたらくひとゝみどるなりしゆるい
なりそのあいたにあくらみの人のうまれ
たる時しにはしきとふしやうとなしてあくこけるに
ぞ又その志ゆるいにくらさひとゝあるとのもねつるが
これはむかし　漢武帝の時李陵（りりやう）兵（へい）に将として

匈奴（きやうし）とあらひやふまとゝ思ひまとゝ今ぐらしとり
その志そんのほくてわるに乃これるとのこそ皆ゆるさ
ひとゝしとはなるとゝしれとゝ此ふことそ見るに王氏の
ざくろうなとなり李氏（きし）のゆるひとゝとなんぬる志
ゆるいのめざしかまさり事とそ見るへかれ俗の人に
と中俗の志ゆるいはなるに中俗の人となり癩病（らいらう）
の志ゆるいはなるに癩病のかしこやくつゝへあり
とあまへあしきてるまはかくまてよくその統（うう）
つゝへあまともよきてるまは又統の法ゝそゝぐり

事のあんなるさそこそ大儒（ぢゐ）先生のことゝらひまと
なるにはとんまゝのそ志やく男となりてゆ〇とそゝれ
人の志そんとそつわにはじんぶんとそしゝあれ
玄圃堂随筆に多くゝ志ゆりを志るしてうづらの
そのみとゝぬるさゝりにつ〇く小田人しきかごの
うちに志きあるとゝるのぬきとるなんとよくなくうづら
にかぎりてなるに此やまいのあるとのなり小べ人
しぬるとはいへども多るいのかく溲（ゆぐう）まへをいまも
なしうほしのうまれしまゝりそゝ志んの毛の

わなより水のいそめるやうにいふなり此やまひあつかう
つかうぞ難治(なんぢ)の症(しやう)なりつねにハ人ぐるめるとなる
うにひとつの奇(き)葉あれども知るあるもくれなの
かく秘しなかりけりうつくしのある人とゆえにも此
るをこてかんにやるをしいなるなりけりなどゆえハちお
るもしやもしぞつゆかく水いもしかうつハのそとよ
ちづめをきてゝのなる此水のなし見えぬなるなり
とぞ萩葉まかりくまもと読むるを地すなるふ
まハ志ほ氣(け)えどくなるしきいふさらもんじ

翁がねもえまへ随筆にのしつかるまによつの
まじなるのさてこそどうしとそぐくとおもし
ものも秘つのなるえ睫毛(まつげ)なりかり風俗のならにけりと
やさしくえともうつしとてかくしたるもんてハいと
めづらかるもろか
晋書張華か傳に恵帝の時或(ち)る人ろの毛のながさ
三尺なるを得てあやしとして張華にとふ
けるに華さもしとて悵(ちやう)然としていはくかくハいか
ていふあるあるしてやうなしこそ海鳧(かいふ)の毛なり

益才

ひとしさしきそれこそ大学の八條目にも身を修むる
ところぞ天下をおさむるもとゐなれ
譽おほく徳ある人のすぐれたるにも例しおほかり
之はよしなきことなれど文よみする人の
うへにいはまほしきこと
南史宗室傳に梁の豫章王綜が母は呉淑媛といふ
もと南斉の将東昏侯にちかづきありしが
ての後潘余がつまにありけるが斉ほろびて
梁の世となりて又めしいだされて武帝に寵せられて七ヶ月

かくして皇子綜をうみまゐらせしかばその月の
十ヶ月にたらざれば宮中の人皆帝の子にあらずとささやき
とうたがひ綜もまた十四五になりしころ
あやしき夢をみしよりひとへに年ごろの夢の姿
のことなどことにやうすがちがひつけし綜は
むかしその母の一夕むかしの心のうちを
おもひもとせめしかしかもましに母呉淑媛に問ふて
人の母たる人のは志るところあるなるべしゆへに
いまだそのあやしきこそ一夕なかりしがあるをしき人

とそゆめとあらじいひしかハ淋媛もこれとあやし
こそゆめとんるところハいかるまでもこの人よし問
しに綜つぶさまにゆめとんし人の有さまかたり
けるかそのやうち齊の東昏侯にあらひしかそ
淋媛なるべしひそかに綜におしへしいふあるなんぢ
こそ七ヶ月めしくうまれし児なれハとろくの
皇子と兄弟とおもはざらましいまるんぢかゝ太子
の次弟なれハゆめく此ほとゝもなるなくふしき
の弟とあるとつぶしと綜きしく相いぶれしこ

なきつゐに微行して曲阿にいたり齊の明帝の
こさしれたいしさくんりあれども名ゆえつくその
るうたがふたりおゆし世俗の云きてゞるに父子
相ふれさりこのあれハ生者の血とて死者のほのに
瀝ぎこうひへしその血のかのほのに滲こなハ因
この父子あるにうたひなれと綜けるのきして
やがて東昏侯のつかあるきて血とてそゞこうろ
けるにそのほのこそ血の滲こあるしかハ綜か東昏
のみしるるを徴しあるとそ若茶に解ふてこれ

と語るは又子のあいさこそ此人もなきてんなん
のさしきものなれはその血の滲えうもことなり
ありつゝ御法なれども李延壽（りえんぢゅ）とのあもせぞくのこと
さるされなるはそしかなしさるるとゆとはしかや
いま風俗のとく御法せるあもどしをしなの父さきぬ子
うゆるるのあしは胞衣（えな）あしかくこころひへしさそこそ
その又のいつくの紋の下していぞぬるとのよしふ
ゆるぞくさ門のとるあるあらざるあやしき事なん
かしもやゝともあるしるへあいがわ此ぐしひのことれ

なるきかの胞衣の紋こそこそのこうなるむつかしきさ
いくなるはいとんそあぬり紺屋なんとはまげ江戸
になれは
彭乘墨客揮犀（ほうしやうぼくかくきさい）に宋の時倪彦（げいけん）といふ人かつて太原
の幕（ぐ）くんとなりてかの他にいたりしおかしその
風土のなしいかく男女なつめくふるすゑしめり
みそきせんらしかやく物のくはとのとかこころのあい
だよいきはきてさきうにさぐりとともてくらへらほと
にその他にとめり人こそその歯こな黄なりけり

文選に乃解あり稽叔夜か云の歯ハ晋に居て黄なり
とハなり色かいめかるりとさやうなし色本草綱目
なつ色の條下時珍より註になりめかくる者は
りきしハ人の歯として黄なりしくしたりとり
晋の太原にハむかしよりなつめおほしやかなるとそ
前栽に植くこゝしと流るゝ土地にて免除る
土地ならずしハしかるかぢゞしよりて占
とるりに周礼に日しゆみしあもしてさへ之
ちこちゝみの麻績とゝまの歯ハ鍛背いとむハ

ならひによりくゝ〳〵の志は今なほ志州のめのみハ地色
ハなくうるともしとも世になれまさ申てになん
あつく舟師の跡なりハ志ぶりに似てごさや乃
手代のつゐハあれく鍛冶やの子孫の志この今ある
ハさてこそせんとなれ
晋書陶侃か傳に手のうらにすちありて師主とし
いふ人のかたらしかつて陶公の手のうらにさしして
いふあり君が左の手のなかゆびにあるさて手がゆえ
きて公となるべき手なきさうさうなりとしぬ

ことき八州のつかさのと領とるほどの徳あるはかのた
てまとらのよきさしもいよくそのさしこそ行るゝ
假令(たとひ)をそまとらの十のはじのこしはたつし
をうさしあるともその人或いは上と茂(ふかしろ)にしてむ
かんのきざしなんどあらましかは八州によりてのは
さてゆきぬおのゝ手あしのようとうなれてさらひと
もひきなるゆしこのとあるとへ大舜(しゅん)にかされ
まうひとゝあるは天子となるまひ項羽にかさるゝ
ひとゝあるは天下をうしなふるの徳にあらく

ひとゝにおしぶるをさるべけれはそのまゝ
人のよれさしあるこのはかるゝはそのさしと毎のまゝ
してなくともその徳をつくしるゝ風俗のいふ
ゆゑ鬼にかゝる様よりもつかしを孔生命(かい)あらかし
き天にありと聖人のをしへてそのまゝ即ちと
毎のこゝろしてをのゝ力をとらかしらにかゝる事
節(とり)なくは論語のおしへてさそこそたんあいじんぶふの
なりたらしこそなるべけれおのゝ徳義つくしむるの
のまゝぶるこのく毛病(くせ)によいくらはしは祈てまそ

なんどいひしとてさらぐいとのぐさ太郎の出たるや
梁書羊侃が傳に彝人张淳跪といふものありしに
その腰のわかきことしまづかにそのかたに一尺六寸にて
よく人のあるごろのうへにあらしまひとそうな
てあるとぞ蒋系に醉ふてこうしと談するにかの天
のとのと生まれ四支百骸に賦まるところ甚くの
ほひあり肉ありて肥瘠といへともせんてんよりうけ
あるものなるに腰やせさせるくんによりうけ
心がけるや韓非子に楚王細腰とこのめハ宮中餓死おほ

なしと此云ことよりて説べんにて志ぐいの沙法
ハあらしひとも風俗のつゝ行きよりこびと人にとゝ
ぬるとくその分とつきまゝあるとさしたるなる
なりきおよそ支躰のうちにて男女ともに腰ほど
いそかハしくことのごとにつかはるゝことなきとのこと
あきらんを男の分にしハ中に射るにも腰しまのるにも
腰ハんぶにつかふにも腰とのかくにも腰やはしとり
手まゐしとるにも腰よりつきまはらうかごうきふひの
ひしとりぐるものやひふきやうなんとも腰ゆうきとしなの

身かしハよゆくまゝかも腰ゑくめかも腰ことさ
せんかも腰のひとちとくまゝかも腰ゑくゆひ
こそまゝくる○淅しせんしくなんとも皆腰すこの
ゆへにはんしてハくちとてまゝかも腰よハれハへん
屈しまゝくしきハまゝとてまゝとも腰よハけもハ
又まけゐりさそこそ放屁腰といふくいやしこゆり
ハ放屁ぶしたひなりとさまんとしかまハ腰よハ
りもしハ又しりがくしし

五代志に後晋高祖天福七年閔主曦群臣とゑんし

て豪飲の酒のちかしゐしかハしめしおかし侍臣
皆沈醉とて座をさりぞきけるに翰林學士周維岳の
ゑ自若として忍んにゆくしかハ閔主問ふて維岳
なんちか身こそまゝなるぞ身けひもし人なるかなん
ぞさけのむるのかくおほきやしおほきけもハ左右
のいふあり俚俗のことハざにさけふくゐしあり人ハ
そのまゝにハかるしハべつのもしいくありと閔主
きて飲ぜんとしてあるめつくりなりとのがくりあそ
かくあしハ維岳をとしてて殿とくだせ朕ちらしよ

りきかたしされてそのまゝにしてえんなりしとのくとと
ありけれは仍臣いさめていまゝ思ひ人あけなりはしく
雄岳をすゝろしらひなは此のちあれは又陛下の劇
飲に仍座せんやといふてもいかくばかあくの図主な
ほしともよくそのいさゝ風しをつねに雄岳をうろさ
ぎるしとぞ蒋系に酔ふてこれと後まるに却ふそ
さけあしひとあしまぎら人なん稟受のまゝぶり
おもよしぎるとのかかんなりのくりもこりしとも
いふべきあらなり人あもそのおのたしまゝは以つてき

のさけぶまいろあぞいぞこれ南海くんおんのきまり
て定に入るやとおほしきやるぎごしのいとも
やさしれをしなあしそのまゝのあしくぬきは尾閭
の沃焦石なんどもそぎしてあげぬるあつぐしまゝ
があんなきあぐそのくしたのべりなるのは志し孫
ともそのんどそ蒸つなり志ましにはあきえもへ
いとく酔ぬきは人ぐらの志ほふけるがごとくにとく
もさけすぬるはさそこそさけのむ慧眼の人といふ
へかれ風俗のさけののやしきやしにいとうん人あていと

ばしにその志あつまなしつちのそこいろくちきと
て鸕鷀のまゐとりかしはなるそこ　ふきハぬきしれ
ともあしぬこんにやくかしまぐるまに骨董舗をと
きいぐしぬ

和歌八重垣に岩橋のよりのちぎりといふのは大和
の國岩橋の神ハその法をかたこゑくくましぬ
ハ夫妻のちぎりとこめらふにあらはしとあるをそ
あひしらふこそその法をかたのこゑくまぶ申へなるめぞ
と蒔葉に詩ふくこれと説とるに唐書波期国の

伊に波影のひかしなる羅刹国の人こそそのかたちし
きこゑていやしく珂名のうちくちき身めして
けとの牙あるのつのあるうまれなり林邑國へまた
ことあきなしやるに又なるしはよりとそうまふ
こづかしものおとてをぬほへまとぞ北のうちとの
こゑくまとをちぬりて岩橋のうちもらやつの人も
まぬかれぐさ人情やや孟子告子上篇に無名指の
かぐむてのびざる人あらんにその申びのだしなんと
いふとのあるなハ秦楚のこちとともとしてきれ

らい

ゑんどろどろのはやふれやまるにはまりくといぞぬ
ふるんとし二重又よりのちまりの名としいふぬ
しやし

日本紀に推古天皇二十年百済より帰化（きく）の民あり
かららの人色しろくまだらにあくしれ
あまし癩（らい）となへしはじめ國の人これとあやしむ
てもしつてこれを海島にすてんとせし時その癩
人きしてあるところなしや日本の人とこそなどえ
あまぶしろにこころく癩あるくとめくくちからしもやまひ

毛のまだらにしろきも國中にかへられうれ
むかしの癩にしろきとかくれなしくつら癩の
病としにしろきとかくゑるるのあやしわれその
しろいろぞ海島にうつされたるをはしてたてまつら
しそれ彌勒の殊にへつきしと語りつるにむかしより
らい志つぞ天下のなかのかくしべきとのみぞ推古の
御時もそれにかくいふなど百済の白癩人なるを身の
けからはしくおもはしきやましあやまちつ
名し悪いはなくしてしりまとまつ國の人みてあまれ

まもしなりしとの給ひつゝいのかさこゝみとゝ
ゝれをきしへゝ人をとゝかめゝらこそ入をきるまし
風俗の人の不德不義なるまゝにうき世をよけ
てとゝふさらをは志らずして人なるゝに人乃
小ぶりとかめるんとしてがるさそこそむかしの白
麻きりぬといふてをしてそる人と同しきとめる
ゝ是へいまも又此からまつまも人名づけてうつゝい
と称ふらといふあるとゝかゝしにさんじやすやと
弱こそなるれざらかを

山谷集に四休居士の詩乃序をのせて宋の大醫令
孫君昉四休居士とかゝしして詩つくりこゝろ
さんしていふあるその詩に麁茶淡飯飽即休にて補
破遮寒煖即休にて三平二滿過即休にて不貪不妬老
即休にて蒔菜に醉ふくこゝろと読ばるに此詩山
谷集に題名のせらるもしもその詩つくるる人ハ孫君
昉にその序のこゝ山谷の撰なりける風俗のこゝがく
さんしてこの志りがほなる人なんとハ四休居士の詩ハ
山谷の作と書へるハ何やまりぬさて又三平二滿と

いふ文字ハ孫君昉の詩よりはしめて人之作りて他
のふみにかんがへあはせてあるかれとも字義ことなりとき
をしるのりんたやすといふなるゆゑ三平といふ
とりあはしやうなみしみつたびいかならといひなれ二満
ともハ両輔頬の豊満ありしてうごくようもちあはれ
といふあるそのかくら小児のほそあるゝ紙とて活套
しあるわかあ女郎のめんとも いふべき名あはさ
てこそ風俗のいろはもんりのこなたにはなしかく
てなれはいきく頃らしくもくらべくし 詠せらる

又おかめ三平二満ともいふべきそのあるや かの佐士
もまたるもハそれいら休あるいはいふものにかあく
きとうるあすとも人んのぎおもしハありんまへ
をの総えを休しめぐらハおかしけれと
左傳に成公十年晋の景公由あしたるにまつのおき
厲鬼のうちへいりてしかとうてたかいかうて
いゆあるんちにあかしたるところの不義なれハ
つとし天帝にたまいてあんちをたろはあるしく
大門をやぶりて寝のかいをあえんをいはく公おそれとて

室にとゞまりしゆへハ此属鬼又公を追ふて戸をさぶ
ゑとおほへてゆゑさめたるに桑田の巫をめして此
ゆゑこしるハやちふおかし巫のこゝも公のゆめと同
しかりしとまでに公のやまひのさしゆとしきしふ時
醫を秦國へとゝゆゑしきれハ秦伯より醫緩といふ國
手にゆほせて公のやまひをとゝハやちひしに緩いまゝ
晉國にいたしまう時公又ゆめにもふにハものやまひ
里の豎子となりてかの秦よりきたりしものハ良醫
なりかきいたしはなるしはまことをとゝなるんなれ

ハいつちへかのかるゆきをといふこれハものいとうの豎子
かいふのり肓の上膏の下にかくもなるハ良醫といへども
いかんかすへきとほどなくして醫緩がいたりて公乃
やまひとこゝろにていふゆゑ達もおよそ茶もいと
らはたさしへしはし杜預どのゝ註に肓ハ鬲なり心
下を膏となりとそ義系に醉ふてこれを絵まるに
傅士凱左傳辨誤に素問刺禁篇を引て鬲肓の上
中に父母ありと楊上善どのゝかつに心下鬲上を肓と
いふのも心を陽とは父なり肺を陰とは母なりとそ左丘明

とのくとくがふに似たるともかくあやしきふしのまつ
こそ志んしがたけれそのほかもきたひの史のふに
もも左傳のせんにのもるるなんとまちくあんなるも
隋書許智蔵(きよちぞう)が傳に秦王俊(しゅん)マタしひしてふて智蔵
をもしく脈を診(しん)やしめんとのとりけれあり
あるかりし秦王いふくその亡妃(まうひ)崔氏(さいし)と申ゆんと
ふらかり亡妃のいふあるこもしきとしきとしかふるが
しあるにきしたるにきくがごとれ　許智蔵がまさに
いたんとしたるしけれ人いたるにはきとしかふ

るのなりしさしめとくさゆんくとなるぬるとおほへて王
乃申めさゆんちふるにそ其の明夜王又亡妃(まうひ)をゆめ
ちふに亡妃ようてびいふあり妾をかくことを得傳
てきたる霊府のうちにかくもしたれは智蔵いたる
いんともこもしをかねたるるこそるかるへしとも
やかて智蔵いたるにゆうんて王の脈診していふあり
あれむざんや王のやまひこそとてに心の臓(ざう)にいたる
なるは醫やんのもとくぬべきよしなるも王はなる
らはほどなく痼症(くんせう)おこりて薨(こう)しおりんといふたるか

風俗醉茶夜談前編巻之九終

風俗醉茶夜談前編巻之十

東都　多羅福山人　戯撰

態藝門上之上第十

南官疏畧に倭奴国ハ漢魏このかた中國につかせりき東海のこちにひらくその地方會稽臨海と相のぞめ其勝國の時にあらて倭人の中國にをもてゝ何まなしとるてもとゆるされけり ほとに四明より海に出てゝ中國にいたりてこゝにあれしかるに其あまなし却のこころの欲とりとこころにことゞれ

らしやきのぬりまひして堆郭をやき民居をうまめ
ていくらうべちりもし州郡のかねをなしけもしハ
ゆゑ祖宗その情をさぐり志りしめくしもしより
つねに日本の互市ゆきじとをゐらしへりとそ菊
葉に醉ふくこもしを誤るに明朝の文史に勝國
といふ元の事なり元の世祖忽必烈至元元之
をしめてこゝやこと燕にさごめらもしとしそ
ゆゑ國の亀山帝文永元之かゝくるの小條時頼志つ
りんのころにあそもるなり唯の太祖洪武元祿んハゆゑ

國後光嚴帝應安元年なりしハ日本より互市ゆき
人のゆゑをゐりハゆゑ國南北朝じやうらんのさわちし
かくとのさハかしかし三十門なりしハ高賈のともかし
ふいうりしつくとのとそこうそび人ころけるを
をふゆしとうろへし世の中にまゐる民なれハ菊
古の互市ゆりして堆郭をやもうこへちりに州郡を
りまゐんしもしハさもあらぬへきしのなりしへ
より ゆゑ國才國の帝王をつくしゆゑ志やし
をわのをゐにあらけしく隣好をゆきあらふさ

ゑるるとも雲笈七籤に倭奴國ハむかし黄帝乃
時にしめて中國とはしぜりといひ山海経にハ堯の
時にしめて中國とつくせりといひ王充論衡にハ
周の成王の時にしめて中國とはしぜりといふあり
皆神代のあいだのるるくし日本紀に垂仁天皇
八十六年使を漢につかしむふハ前漢の章帝中
元二祢んのるるりけるに三國志に魏の少帝青龍四
ゑん為十二月倭国の女王俾弥呼使をして奉献せりと
しるしあるハ日本紀神功三十六年の事あしく

俾弥呼といふハ神功をさせりたるなり隋書に煬帝
の大業四ゑん春三月倭王多利思毘孤入貢せりとハ是が
國推古天皇の十六年にあたりなり舊事紀に推古
天皇十六ゑん小野妹子にめいして使を隋に奉せしめ
ゑんとしるしあるハ隋書の多利思毘孤ハ推古の所なる
をいふあるにや天皇御いとなハ天璽国押開豊櫻彦
尊と称しをまもしハとよさくしひこの三字の訓をた
うねんあらやくせしゆへに多利思毘孤の五字となり
けらし唐の高祖隋の申げをとうけるにてのちハ

志えしく倭とつゝじたるなりしか日本紀に
舒明天皇二年に大仁犬上君三田耜大仁薬師恵日を
めいして唐に使ゐらしむと此時唐の太宗貞
観四年に始めて遣唐使のたしめなり續
日本紀に元正天皇靈亀二年夏六月遣唐使をめい
しもふく從四位下多治比真人縣主押使となり從五
位下安部朝臣安麻呂大使となり藤原宇合副使に
なりて唐に入りたるは玄宗皇帝の開元四年に始めたる
なり此時下道真備し安部仲麻呂とし十六年にし

がくとんの人あめしてどくせんして入唐せしは吉備太
臣ハ唐にあるゝ十九年にて五経三史陰陽軍制陣法
をよげねまでことくしなしひゐく聖武天皇天平
七年春三月多治真人廣成とゝに日本(帰國)あり
しなり此時唐よりもたらせるところの唐礼一百三十
巻大衍暦経一巻立成十二巻孔聖なしじに十哲のざし
し測影鉄尺一枚銅律管一部鉄如方響写律管声十二條
樂書要録一巻絃纏漆角弓一張馬上飲水漆弓一張露面
漆四節角弓一張射申箭二十候平射箭十候をりんせりき

安部仲麻呂ハ唐にとゝまりてちやうてゐのくはんにん
となりあるよし唐書列傳に日本の朝臣仲満(ちうまん)とい
ふあるあるめて朝衡(ちやうかう)と称しちやうてゐる清くへ
秘書監(いまんりんきやう)検校左補闕(ほけつ)にいたりとぞ續日本紀に光仁
天皇宝亀十年夏五月安部仲麻呂唐にありて卒(りつ)し
あるとし土佐日記に仲麻呂のきちやうハ聖武天皇の御
時なりしハ孝鎌天皇天平勝宝五年にいたりて又
入唐してつゐに唐にて卒しあるとぞ定家卿
の百人一首にのせしもしかり阿部のとしぬりけれハ

りまちかなれみかれのやまにいでし月もとゝ忘いぜし
うたハ仲麻呂唐より帰朝の時うたぶにうらいて
よめるうたの集なりとし古今集にアヘ作りぬ此時海上
大風にあふて安南国にひやうちやくし又唐にかへ
りしかハ肅宗皇帝(しゅくそう)こもしとこやうびしたまふて散騎(さんき)
常侍安南都護(とご)北海郡(ぶくかいぐん)開国侯食邑(しゃくいう)一千三百戸をゝあり
て大暦五年をゝ心にて唐に卒しあるとし七十なり
と或しハ七十三ともいふあるせんご唐にとゝまりけるの五十
年にあるなり肅宗皇帝より潞州大都督(ろしうたいとくく)をゝしたまふて

さて其後ハ久しく絶たりしに桓武天皇延
暦二十三年に葛野麻呂菅原清公をめして又遣唐
使となし其ほかに僧空海僧最澄など也
みな入唐せしめしなり是ハ徳宗皇帝の貞元二十年に
あたるなり其のち千光国師栂尾明恵上人なんど入
唐ありしかども遣唐使とめいせられたる事絶てバき
かくれなり南北朝の時にいたりて後光厳帝延文三年
肥後の國菊池武光後醍醐天皇第九皇子良懐親王
を奉じて使を中國につかハしけり此時明の太祖洪武十八
年にあたれりそのゝち後小松帝の應永九年に
至りて明の文帝より足利義満公におくり
日本国王源道義公とあてしるして隣好をむすび
けるのちあさからずしかるに同十五年五月義満公
北山の亭に薨じそれより後ハ其とし十二月明朝
より將軍義持公へ使をもつて其のち通信使あり
てたえず又なりたるもなれどもおほくハもちひ義満公
をたハめしふして泰献王と称しそれをたれつかし
し禅僧の絶海雪舟なんど相つかハし中國へとかお

ひかしかともいかしへの遣唐使のごとくにくんかへの
使をまきらるのはなかりしかりそのうち應仁いやら
らんの餘とへく天正文祿のぜんこまいくらぬはばらん
やねのやいひつなしざりまたにくわんまゝめいのうちに
乃がるともかく中國にいくらてうみへちらに州郡に
あらしてしまうんとさしどしなさしめあしは唯朝
にてしこうとうもへく備倭貼守といふくんとまつけ
倭寇のいきをとふせげるとし大明律にみえ侍らぬ
嘉靖萬曆のころにはやひしかは倭寇いよ〳〵甚しく

此時まゝ國とく中國へとかいやうとの八幡太菩薩といふ
たゝあてゝゆきなり田へに明朝流俗のことはぎに日本よ
ていふ所かいぞくのるゝ名づけたれを八幡といふ
あらなく八幡太神はあらしもまゝ國應神天皇を
まつらせるゝ神祇なく續日本紀に桓武天皇延暦元
祿ん五月宇佐の三んたくそうとんして太神の
あらせんありて太菩薩と称まへしとのゆるすなりと
こひけるは天皇そのこひをゆるしまゝ
太神とのしまゝあて大菩薩と称しまるへしとぞ

九ゆんハせんぐん神のうちあもあれ應神天皇なり
にぶけりしを加へなきもうるまさんさしくのそしと
にハおかしき事なれとも ふとゝぬ人のきゝるハ八
幡太神といへハ久けく耳にうちてきゝぬにきゝ
へうにそ 太菩薩といふ ほとけのなかゐしし
ひふこそ むかしハおかしきるるれとも いまあくハ
ほ俗の人もおかしと おもとぬ耳になりあるハせんかと
なきいとうなり 桓武の御時にハ ぶけりふさうんに
おこれハ見しゆへ 神祇のうち おのしと おもうへく

あきゝえしへうにあく かくぶつがしをくらへまきうめ
つくりなりるるれとも いとくの 綽号(あざな)を八幡とも
ほけくいこくの人にのこしきもうハまだしも
よりきこそこそ 梅村載筆に唐船のぬけ荷をうたゝ
ぞく 名つけて長崎のハくぶんに又これを八幡(パハン)といふ
ゆるいこくの人にハふとうきぬるなりこの國の人の口
とそかくいへるハふかねといふへきやとんまくといふへきや
應神天皇とハどろぶくの 坊やうとなりと 坊とくるや
法華経に三乗(さゞう)ハ一に聲聞乗二に縁覚乗三に菩薩乗

し聲聞ハ四諦とさとりてこゝろをほとりとの縁覚ハ因
縁とさとりてこゝろをほとりとの菩薩ハ六度をれ
こなふくみちを得たりとのるりしいまゐんぼるに苦
集滅道の四ツのとの名つけてこれを四諦といへるなり
又六通といふるあり其旨三乗のくどくにとりて
つゝまりところの一に天眼通ゑんいしの色をみる二に
天耳通障くれのこゑをきく三に身通ひざやしし
てゑえゑりかくれしりをとぶわにハ四に它心通萬慮
こびかゞこのてしほがごとし五に宿命通神とく

往事をしる六に漏尽通累世を慧解せりとそ若
其に所ふくこれを該はるに功りそはしまの法
華三乗の代にいたれる人こそ六通のるのハいたれ
とさとりへし六通の代にいたれる人にしてがんぶ
くれこみらわしん三明のるのハ又物のもとしるへきなん
し晋書に杜預どのいたれて破竹のいきほひなり
いまゐる風俗の人にも三乗六通のるるんありけれ
ちゑもきゝやしもなれ人のかしきなれハりゑがやか
ぢくむまゝのをかごるのを瓏をほとく蜀を乃

さしのおごり長し　ゆゑにハさまざまの事称がふくか
けふのつまるところの三乗ハ法華経あれバえんぎふか
むつかしき悟道ありやもしもじよハ三乗を
悟道ともハ六通ハそのくだくのいろはところにて
おのづからかくもありしいふともしれぬいふこと
ろの六通ハあらかし三乗をさまたげ人といふとも
一隻眼をも具やされハ又そのこころのえんごとくするそ
まやうつあしひらけてみやさそふらそれなる
まいそやかの六通ハさとるかのいふしれおもしるで

といふにあらえハ天地人さんさいのめぐれる六のさふ
つらそのあり一そのひろくつりもの博擲も二そともいふ
いそらしどし雪三そらししきしの風雨よとびゆるの火の
玉四十三ぶんぶんへかくかがやりゆんやお五そがるハ
むかしに知ろありしとそのなハ国千郎蘭もゑんなる
たりんごきなり古法医者の一なみハぱんとし
てつなしあるまみつくぞ
梅村載筆にみつの曲に都曇答臘の曲ありけるが
こもしとありくたりのきよくしなりとそ薪子よ

解ふくこれを讀まるにいまの東都四座のさるがくの
式三番なりしにはらぶきたぶねの物まれてしの
こゝろの元来にとりくゐしてしくとうらへらぬぶらを
のとつくりとゝるもしけゐりやしきふまとも三番ゆ
とにいめしの都曇谷臘の曲なりしの世にいつ時か
まりぬまじハ久しき故事こぶつを讀へ(しまるも)
その名のことをそゝゐのゐるに都曇谷臘の曲をそらに
とハいはしにて三番叟をふむといふるさそこそ
野鄙なりし風俗りんぎよのへんくいハとゝより時代の

新古によりてちかふくもとも志をへこのつきかへぬ
ともかくにいくまじハ物まれてしのとんくハとふく
ゐしてしくといふるとも志ひしくなりしへ
法厨とうたなゐく称まこゝか三番叟をやましの
をりけんをけれちやうとうをぶきさゐしへし
北魏書胡国珍か傳に国珍かむまゐ靈太后胡氏のそ
らに明帝のゐんにやしましゆしハ帝のくしね
につゐるゐより胡氏のとんぐし天下にたくひなり
しに国珍とし八十やうて薨し けまハ帝

外祖のゆへとてこれらあるへは小功五ヶ月の喪をなし
し哀を太極東堂にはおもふかしこれとおもし
てはしの薨にし日とり七ことにいたりて千僧齊
をまふけ齊ごとに七人にはなれて百日志あつけせし
むべしと又萬人齋をまふけ齊ごとに二七十四人に
はなれて百日志あつけせしむべしとも萬家に解
くこれとも後にはなれに二十一史をもつてしまうに
七ことのまつりのるものせたりは北魏書と北史にはし
めて見えたりぬ唐書にも国忌行香あんといふ祭式は見

えたれとも七ことのまつりのるは又見あたり侍らは
まてに北魏書にもかくしたりしかれは南北朝のまつり
よりして七ことのまつりこそとしあるはしたり例
しあれ畢仲荀幕府燕間録に国忌行香の事は後魏
の時よりはしまりといふれは唐書にいてたる國忌のこと
も元魏よりつたはりたりといふ志をなしかれ唐會要に天宝
七祢人華同二州にちなくして國忌日ことに龍興寺
にはなく道教齊をはこなふへしとしたりしあれは國忌
のるものと唐の世にいたりて又もはしまつりはし

こそしあらめ又國の史のふるきに七ヶのまつりの又
えんぎりは續日本紀に文武天皇大宝三年二月癸卯太
上天皇の御ためにも七ヶの御まつりをおこなはれし
こゝにこれ朝七ヶの御つりの國史にのせられたり
めるり又月忌とまつるはしめて東鑑に見
えたるはこゝにも御つりこのうちのはいふもしかとも
はりの年忌とまつるもあるんともそのおこなはるゝ
ことされしもしめて元亨釈書にいへるぬ相国寺釈
瑞溪(まいけい)がいふはあるべくいつまいまやしとけ

まりに年忌ふく紀の御法なれはいまゝる佛徒の用
ふるところの法事はなるべし儒書の礼法を假借(かしやく)し
てこれをしんしやくしぶんしまくせし事なるんと
はいふにしくぬるはふりしやのもんぞ忌法すはまつらく
礼記周礼儀礼の喪式(そうしき)をひきかにかり用ひたりしが
いなりしめ又七ヶのまつりのてすは輸墨(えんぼく)大全にそのに
アそおこなはるところぶりしやのこちなりけるの日ごと
のまつりとも現にこれとのせられたるのはまつるん
ともさだめていくしきよりとこゝろにかけてかくしし

あしめしおとひしおくし或ハ志やとんのおしへ
て七ゝのものハ地蔵本願経にいてゝもしハこゝ徒らおし
きもてゝくひなるしめ 輸墨大全のおしへなんどか
なしけれ此経にとりて志りしあるまよしいふてれとも
萩かぐがんに五車の書のくはしくいなり聖賢のおしへ
のへたりぬしぶし擬書おほれもしハかの本願経とやらん
もとしや浮世ゆきのぎさくあしく七ゝのものと
牽強附會しあるんしこゝろとれく凌雲院前大
僧正継天師ハてんあい一宗のかくさしなるもしハあらり

ことあくかの人に問ひまいらせてれハ僧正の云ま七ゝ
のみはこそまん記ざれとつにハかもこれとさりしあれ
とし志やくてんの模楷となるへきやしとんにハいで
さらるまなりとそへらもしこそ本願経のやつなん
どやかめらもてのるまるあやとしとり本願経ハ
こがこゝろのふしなしのハこの真贋ふかく河内まべき
にあらさりけり中國七ゝのおしへのものハ托跋氏の國史
にしめしくんえたれハ道武帝の代北より南夏
にいたりこれあれ本國いてきのさねもいとと

才國にあねくゆこれはしめ多事あるけるや
よしその礼のゆこもろ國のせんぎはしくさてゆき
ぬかの七ゝにさねてんといふもそのいとをいふる事
よしいんに魏収どの李延壽どの二史家もべんド
おりもざれは蘇も世るいぶかはしくこかるし
時よりしぶぶりのふるんるごとにしやんあくらも
ややんとつるくころに牢と記在せしに笛ふきぬる
おりし五さい十二ゆつめりて宮とあいなしその事
かんがへんりに十月應鐘のへん宮と五月蕤賓のへん

徵をいはされはかゝ生じしたしもせぎるぶやりのゆさる
由へ宮商角徵羽にへん宮なん徵をくらへて七さいと
なしてそれゆこゝめくりしは五さいと称し
ぬきしともしつは七さいるしたし理のこんぐんとるもの
ねんやしゆこよのめぐりも七調子にとゞめしは
七のかまこそ天下しぶりの理にあねくなしてくる
ふまじきるるん五さい十二ゆつのこにかぎしめ韻鏡悉
曇の唇舌牙歯喉といんとも五かんのこれは又反切のつゝ
ぜざりまにしんぜつけしこしのほかに舌中に歯をとる

多なんゝ歯中ゝ舌そゝるめなんとなくて七又七なん
ともして其のなんき陰しゝ多れハことゝ五なん
ゝ称しめれとも又其のなりハ七なんあり尚書大傳ハ
天子の政事ハ春夏秋冬ゝ四季のかゝきいと始まゐゝ
どもてんとんちつてなん多ゝの三つのとのなりて又
よしとて七をわれをなむらくなり舜典ゝ璿璣玉衡とゆき
らゝめして七をなむとせぬふよしとあるやんをまつ
くハいてんきゑるより日月星ハぎのぎやうなり
とうけらそのゆくなりとし歳星太白熒惑辰星塡星の

五つのとのなりて又七とるをきなりなり易の河図太衍の
數五十ハなんなり二氣生成のゑよはらきして又七となる
水火木金土の五きやうのとのなりて又七となる
あり如きゑんちの多くそうゝ七ゝ生むゝ皆此
わんやゝ五ぎやうの七ゝ生しとみなりとさしとて
ちやうちゝんちょハ七曜なりとしもふしけれハも
人ハ小天地の多ふとてきうしいみやちくりんなり
の差別ゝく此七元氣とをゆゝ多くいふのあしさの
中つゞ天の多んやゝハ人をけてんさえんの二つわたらし地の

五常しハ又人とあてじんぎれいちしんの五じやうし
これ備りてじんといふものハその身に固有せり七ツ
の気とハあきらかなりその七ツの気よりおこるこころの
情なりとハ又その七のうちよあらはるゝ喜怒憂思悲恐驚に
もとつき七情とハ名つけしなりかくのごとく七ツの中お
じやうしと固有して備てじんといふ中よ多くじやう
なり七ツの日よいふらことよ七夜といふ擬のことぶれ
していふなりそのやしの世界ハとこし又七ツおじやう
のつどしよりてのなすれハなるべきのはしもつなふ

そなへ又七日つゝとひとはにさだめし七の入
とそなへちゞとれしおもなる人のうまれて八さね
おしてい小学よいれさせまなしたいしんをおもいてのく
しやうぎよしやうそしの事をしかししもし七のとし
月つくる人中ふたしめてかくよいるとおつかしへくそへ
十五さいおあゝしてい大学よいれ明徳をあきらかおし
民を新たるおし至善にとゞまる物と知をいたし物と
いくし心をたゞしく意をまことにし身をおさめ
さゆえいゑをとゝのへ国をおさめ天下をたひらかにする

るすまのごしむらし二七十四のとし月ゆゑ人なれハ
大人のこゝろにいりぬるおしへなり七〻四十九のとし
月ゆゑ〇しへ人ありしてぢぶつの理こそはきこゝろなり
ゆゑハ論語学而篇に五十にして天命をしるとおほせ
あるしし七のかぞにとりてしるしあるゆゑ
七十におよひぬるハこゝろおもふなりといふるほどのとし
由へに礼記曲礼篇に大夫ハ七十にしてつかへをとし
てそのくるまことゝ門にかけくぐるなんとあんぢんしぐ
七のかぞにとりてしるしあるゆゑ

しんぶの死しぬる時のまゝ田ゆゑに七をねぎやうの志
めつしるぎやうをとゝぬしかゝ又七〻の日にゆゑにかゝ
ほうをおこるいたしぬしのや七〻四十九日のまゝ
つとめく禮のおかゆるてハいまそ此世にとゝめし時
七〻四十九年の非とさとりて五十にして天命をしる
ゆゑ人なれハ死しぬる時にし又七〻四十九の日かぞ
をおくゆゑハ七をねぎやうの心魂なりとしくしる
めつしてあれ此先天の元氣へくりぬるとし
いふるゆゑや四十九日と七〻のおかゆるのまゝ

ごとくに此ことしらぬて此い思のきてうなれハ極に代
うるうしらといふるのあて代極をしらるへきまやさ
なくしてあの大黒やの志ゆこ志んハ此袋をとりてどぶ
川男なりとといひるハ思ひまちやの神さ母のきこし見
さまして さてこそ此世話とやまことらこそのなべかゐした
ありハあるましけれいま風俗のことそくやして摩訶葛
剌天にてつまんらぶそ大黒と名つけあるハ大唯一
統志の大黒天の名をとりしるか又ハ神代の大己貴命の
名をかりしるかさ母くの大黒のゆゑきにうらのさんさよ

の本を八合所とのぶやしおとしまたきつねこにあらず
称とし大黒ゆく同ことつまれましとのくとなきへ
本所ふか川のうしぞれこしくハ志んこちの志げかなり
ところへてそくまもあるハ大黒といふんハ一まありくハ
ゆゑんざまとし二階にいつことこしまうとしまもあり
なてもあんなれ
南齊書呉苞か伝に苞晩ゆんほとけをしんして
志やりんとなりしよりつまにひとつの法わりてこれ
うしきさがへりかあ或る時弟子におしつくこれ今夕

死しぬへしかゝれてたゝふところのほほのうちにハ
大銭一千とんでゐんなきハ阿堵のこゝろとそこれをやも
よこびめなば九泉のこゝろをはしらへけれといふ
がゝの取にいたりてつゐに逝せりとそ蓮華厳に
てこれと読まるに華厳経に六道ハ天道人道魔
道餓鬼道畜生道地獄道かくばんかねのともがら
けさねくんをまぬるまじと又浄名疏に三塗八難ゆゑ
いふのあり地獄餓鬼畜生これを三塗といひ盲聾
喑啞世智辨聴佛前佛後北倶盧洲人道これを八難と

いふのもかんがんさねくるのかくねぼくしておろし
うたれを一千とんのせはとそかのこゝろつくして
志やうぶりの身をかひとまるハさてこそ廉得紫なりし
いまハ又づくせんかとんかくもさねぶんぢづくへとふ
ことといふときハ風俗のせんさくとそのあらひ同しけれ
けだしきけハせんさしハ八とんになりさりかあらへ
かぶしせんのさしぞくるハざるこそきどくなり
漢武内傳にたまがいきせんとおもしかるあらハ敬とし
つとゆんてせねしきとりしなば五穀をとり天穀を

なりし掩(あん)してこれをたこるに久しくしく
しんたれ人ことに行ふなれば[illegible]
醉ふことを談ずるに道訣(こうけつ)に丁皷(てんこ)となりしことは
齒牙(しげ)うらあはせてうらくとたとさせぬるなりとぞ
此しやつぎやく事をやぐし疾(ほつ)せる時なんどよはいか
かもそのしるしあんなることもたまいきのしやつとなれ
ゑはいまとこころに得しけいかしへり聖人なり
しやうのなりとともむいにぞ黄帝のふとなんとせんかん
ちやうせね乃しやうしやうしやうしやうしも内典(うねん)さ

ちやうねのしかして乃ちの世の擬書(きしよ)なりんもうらかく
りまし文武周公孔子の御云(こし)にはぬしくは天にかけたれ
祢んしゐのちやうなんと人のちからしとくこれとのへ
沙法なんどきはめて功ほせなきるなり孟子盡心上篇に
殀壽(ようしゆ)うたがはず身をゆきなんて以てしまとまりは
命(めい)をさそぬり由えんなりし朱文公の註によりしゐは
めいのちやうなんなりうたがはずとは天の人にくだりけ
あるとうろのこうふくりあるぶりなりこの由へ殀
をくだりつけしまし人は殀折(ようしゆ)をうまでをぢやうめし

とゆとしつく身をおさゆんて いくとのめいのつくるとおら
壽をくらうつあらしし人ハ黄耇鮐背(くかうたいはい)にいたるとも
高祢人をおやしめしとおりふく又身をおさめて いく
そのめいのつくるをまちぬべきにおんとうくの御法をて
こしらきいのちをながくさんとハおろかなる人ごろ
かれ梁孟敬(りやうもうけい)養生論に於ける生をやしなへる事ハ
かなしけれそのなるへきところへ見えこそこれをなすへ
けれなきゆしきところあしくむしをなせる人をて
天にまとりてその身にまさしあのいたりなり

さてこそ孟敬氏どのく此ゑ世の人まゆしつくさんと
しるい天にまかりぬくそのめいをまつらふまゐれ
いこしきろんせい聖賢のこちしいんどもこゝにほか
をまらぶりに虚俗のさけこのこゝいろこのこゝて嗜慾ふかく
てん祢人とかねもう人のくせに天皷なんとなりし
てよしおやしとおほへあるさんおやしのつくれをあれ
えもへ八味おこしくらんとそのこゝておんまよもう人
のおほさよ
飛燕外傳に冥主聰悟(きまゐ)あしして氣術をおこなし肉視(ぶし)を

よくきこへ羽林の官を射へきものしつかしてゆきの
掖舎のきさいくにあをきとしちゅうりにまる息ことども
気をとれさるもしはつるにそのあはひのもつしめしすて
さしけるに枕をなかめなしくきこえて疹栗なかりけり
名をハ名を射るとのゝさましてはらとむえんあまり
見えし折しもさめてらくもくなくてもて宮しくるに打よ
人てその姑妹樊嫕なとしかもしかしる羽林の射者とつ
しゝ名をとてものハ此のきづかしく打むかひなり
帝の御よあへなかり叶はいらんあるハ飛燕目にとめらしぎ

握をかくとくしなんごとくとかくにまじなりくくれの
乃きおほして帝をむかえまいらせて帝飛燕を擁し
らふるに三夕あしてつかれにまりしてせいしれふる
おしいがりけるハ帝の御ほぐよ豊ハあまりのかごとく
菜ハ何のなにがごとく遷延謙畏とくとさがごとくなり
きがごとく礼儀の人ありしきとてに幸せしりまして
打んで丹をなまめしてさとのよはのよのかにさし姑
嫕ひそかに飛燕に向ひくしたるを射るとのあへんなるに
かづらともとらひかめしハ飛燕にあめへてまつ内視三日

肉肌盈貫せるは帝の玉躰洪壯にして見ることをさ
ぞつけおかるゝなるにはしりれとも蒼黒に斫ふ
てこれを読むるは内視とはよしぞ家のせつに同を
めいしぞ却のうざくしをめぐらしこう事なりと此
志ゆついりあしいとうはしく情のなりしこう時しるん
どハ志んき志げめてよしぞ一助ともいふへりれ荒
燕の内視のごときハ両とは志ゆつよなしふ事の長し
そるものあや皮膚九きやうのなりしよいとうまでかく
そのしるしこそなりつを尾俗のなしのいはしく

却ほくさうがしこれハ漢のこゝろよりまぬかるをせし
そわりやさそこそ志やうの打しへか欲かうくの鄉導
をなしせんかんの志ゆけり男こゝろをのよくごとなれ
ふくあるをしへぬしのよつまの所をも甜瓜やうなみ
ほよなりつゝ今まもあらしひうまつくんとて冊や黄栢
なんとなりていつぐいとめうるいあど
弘文院学士公本朝通鑑に後多将帝建久四年五月
廿九日曽我祐成時致その父乃あて工藤祐経をぬしの
かりだにこわしあるに学士公の史筆に曽我きやう

よねのるをとがめて賊と柳営にをしたりしかへりと
ととまり本朝通鑑ハいざしのかしこまり世の人のうかがふ
るるのハざりめづらかなるへきなるの同学の井上嘉膳と
いふ人此よしきつてへあらしてかくりきりあるふ
あれ蒼玉に醉ふくこれと誘ひしに礼曲礼篇に父の
所にはともに天をいくしかばといふゆゑりいかしあ
ようなるはこうもへき聖人のおしへなりかや公羊
定公四年の傳例にその文ちしやうもてその子あるを
とゆくしたりハ推刃のこうなりけり何体どのて註り

一往一来したりこれを推刃といへりとぞまでに礼記公
羊のふりきゆしかくしたりしなれハ曾我まで
たねのあるこうしなりこそけいでんのこうにかなふ
しり孝子なりしめし世の人同にハいとじくこゆべきに
弘文院学士公の国史せんして賊としたりしこれ
乃ちの世の史ばんつとしり人の亀鑑となるへき
かしこれふんでの所とかの左傳に晋の霊公不君
なりしかハ趙盾をしいさめしれとも公の用い
ゐハはしてかへりて盾をかねせんとしたりしかり

くし翳桑餓人の公徒をすゝぎて盾をとらせ人なるに
よりてそのかんのがれてさりけるがそのあとゝめて盾ハ
從父兄弟に趙穿といふ人あつて公を桃園に弑
しまゐらに太史にかゝして趙盾その君を弑せり
と盾きてつかれことゝりるしや君を弑しとる
人ハまゐにあらはとやらあるにハその時太史こゝへ
るんだ正卿としてあげてさらしとこゝへきかんて賊
を討せばるんだる君を弑せるへ人にあらはしてあ
まゝ君を弑せることのそといへるしたり孔夫子の此

るすきこしめして董狐ハいあしへの良史なり法を
さらしてかくさは趙宣子ハいあしへの良大夫なり
法のこゝろにおくとうけはりぬ為しかしむくハ
あげてさらしとこゝへきかんハ此あくあらをまぬる
べきものとものをふるの此るの人ハにくるゝ也せし
つるきぬるの云あてことさらに聖人の御ことゝと左丘
明どのあも出るまゐるが先儒ならのかしこきゆるこ
にハいろ〳〵のせいしてつりけれ歐陽文忠公春秋論に趙
盾ハ君を弑して孔子あらに詮に出るしもしかの

三傳の云旨をしくしたんまべしべと又明の傅士凱の事
ども左傳にのせたる趙盾さらいとこえたるハ何くめしとも
まぬかべきと孔子の如ほもめしといふ聖人と誣
なりぬりせけるとて此誤先生のろんとそうよいか
さぬさかしとしたんさぐらわの事あてうろしくしたし
こえしのあくのことのがまんとハ孔子あてかくかほもハ
何ともしれやとかとへハ左丘明とのと胡説つまにもたる
ようほかのるのぞなかりけれ志をしくこころこそ左傳の
さつてとうとふてこんに趙穿が霊公をころしたるハ趙

盾どのこれ事をしたる何との事かしいかほどの忠臣義
士とこんとも留守の沙汰ハせんかたなきるをかし志かし
本國へんとしし打かしにハさけりし主人をころ
したる趙穿をさわらげして君臣のぞんをたゝる
へきにされくして趙穿が事をまてゆるしハ趙
盾とのかしまこしゆるけなきところあるけ理とそ
ろんしるハかけてさらいとこえたるにあづ
うとぎしてとがのたるハめいしくなりといふ
やこれ董狐とのて良史のふんでとなるもしたる申也

にて聖人にもその筆罰を志まじしたるに
そやまの國の勞我きゆしかるかたるに孝
義にしして林学士公の筆罰に賊を柳宮になる
ことにしたるの祐経かりぞの寐ことのまく
らぐるこうにきりさげあり大刀つゐのおとにおとろきて
吉備宮のうへぬしおほとしなわかでもたごかでとん
ていくあるまきあこそ取にまきれて人の寐ぢみを
うらあるのたらぞくにろいしあるとてかくしたり
ひかやとおとしいしに学士公のいみしくも本

胡通鑑にあるしたるに大義は君臣のうへにかくもたる
みとれ筆罰なりけるしはいかれ大義だといふんにきやう
もとのものいとれなきこうとし月をあて人はし
したまじしいまはひあり工藤なれはうつへきし
もなかりけり折しゆしのまきかくのるいけかとし
きことさいくわとし志のひいくて取にまきれて父のあと
むくふあるはしけきともそのあとあとて十ぞんぎりし
て幕府の御志にへらんにかふしあるるのはやしぬ
にてなかく國史の筆罰にあふまうせんかくこなれくと

なれ人もへ風俗の人もよしはしらに長取飲(いけけ)するとの
ひとへに申く人なれはかりなるにてしてに申すめれ
又ゆのかなくものをやまにそのなりしとゞめられてる
ことしてのちゆつちかく ほうへ人は春秋経傳のえん
きねめもへんへんなしめるすなりしとゞつていらし
くへんをかけて徳をぞくしたり鄉原(きやうけん)はこのうちのつえん
どうや人の懲(くくん)火の鎮(ひけし)火司に申かりはよけれとも如のか
火のよしぶんの如くそかむれは如とひとふけをやけ
つきこうはさてこそ 監(えんしゐ)主自盗(じとう)のはねかしくしといふ

とまたれは又なるにとのく良史のふんてやや此人こそこゞ
かくかなしいくして買ふくらいろ申へに賊盗律(ぞくとうりつ)にと
いかしじけれは申ねくへんぬなりはやけはく
ふいしとうともいふへしとぞ

風俗醉茶夜談前編巻之十終